



学内広報

for communication across the UT

特集：

東大の研究成果を世界に発信！

東京大学学術機関リポジトリ ～UT Repository～

本郷地区統一の自転車・バイク登録制度



附属図書館と情報基盤センターでは、2006年4月に東京大学学術機関リポジトリ（UT Repository）を公開し、サービスを開始しました。このサービスは、本学の「知」を社会に発信していく際にとっても効果的なツールです。そこで、今回の特集では、稼動後ようやく満1年を迎えようとしているUT Repositoryの仕組みや使い方についてご紹介します。

http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/

UT Repositoryとは？

東京大学学術機関リポジトリ（UT Repository）とは、本学で生産された様々な研究成果を電子的な形態で集中的に蓄積・保存し、学内外に公開することを目的としたインターネット上の発信拠点です。

研究成果は、学術雑誌論文をはじめ、学位論文、紀要に掲載された論文等、様々な形で発表・公開されています。また、学会発表、各種研修会、授業等で用いられた資料も研究成果を表現したものと考えることができます。こうした「研究成果」を簡便かつ迅速に公開する手段として、今、学術機関リポジトリは広く注目を集めています。

研究成果を世界に発信するために、ぜひ、UT Repositoryをご活用ください。

UT Repositoryに登録するメリット



研究成果の視認性(visibility) 向上

各種検索システムから研究成果を検索できます。



研究成果の長期保存・利用を保証

大学の責任において研究成果を保存・管理し、散逸を防ぎます。



アクセスの拡大

無料でアクセスできる学術論文が増加することで、被引用数がアップします。



社会への説明責任

専攻、研究科、ひいては大学全体の研究成果を積極的に公開・公表できます。



省力化

科研費の申請書類等に添付する各種研究成果リストが容易に出力できるようになります。

UT Repository 登録から発信まで

1 登録するコンテンツを用意



まず、学位論文、紀要、研究報告、学術論文の登録を当面の目標としています。もちろん、それ以外の研究成果も登録していただけます。



学術論文は、著者最終稿（Acceptされることになった原稿で、雑誌に掲載されるレイアウトにフォーマットする前のもの）をご用意ください。

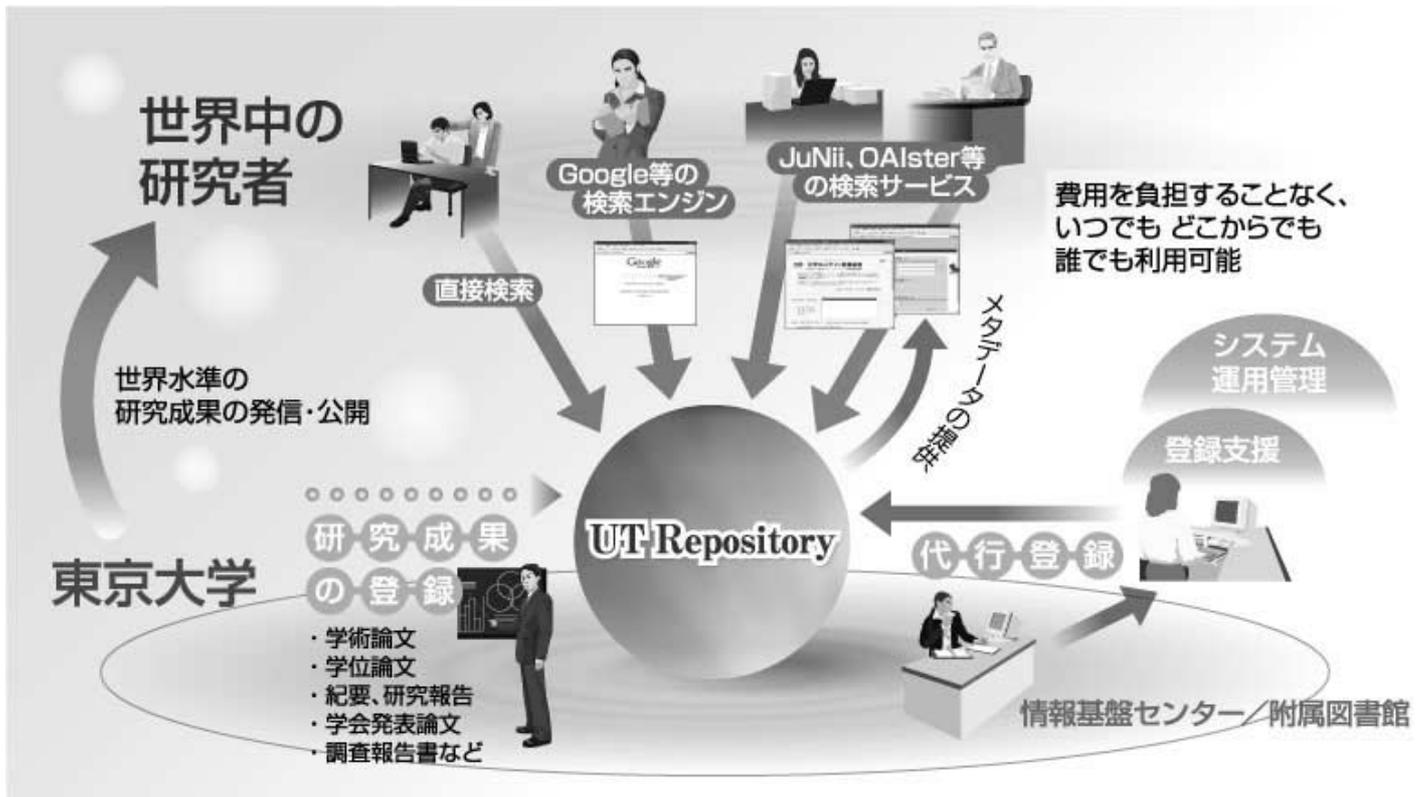
電子ファイルがなければ紙でもO.K.

2 許諾書を用意



許諾の際は「東京大学学術機関リポジトリへの提供論文利用許諾要件」をご確認ください。

<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/document.html> からダウンロード



著作物利用の許諾

- 権利者以外が著作物を利用する際には許諾が必要です。
論文中の図表や写真にも著作権があります。

著作権(財産権)の譲渡

- 出版者、学会等へ譲渡した場合、著者の権利はなくなります。
- 原稿を売っても、それだけでは著作権を売ったことにはなりません。

登録コンテンツ数 **2886件**
(2007年3月7日現在)

紀要 1824件

- 教育学研究科 1060件
- 数理科学研究科 421件
- 東洋文化研究所 343件

学位論文 244件

COE報告書 194件

ディスカッションペーパー 557件
他 67件

1 と 2

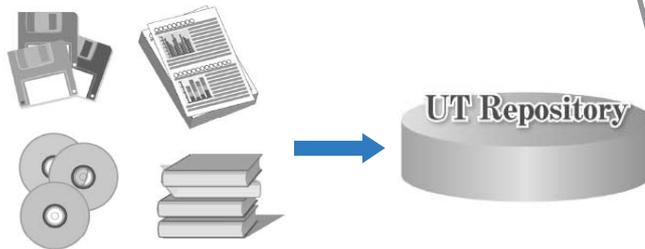
を情報基盤センター
デジタル・ライブラリ係
へ送付

digilib@lib.u-tokyo.ac.jp



3

ファイル、許諾内容の
確認・登録



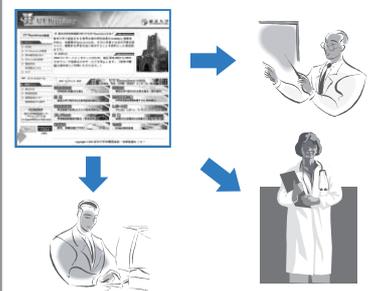
情報基盤センター デジタル・ライブラリ係が作業。



出版社、学協会との権利関係は
デジタル・ライブラリ係が調査、確認します。

4

世界中の
研究者へ発信



世界中から、誰もが、登録
された研究成果を利用でき
ようになります。

問い合わせ先: 附属図書館総務課 (内)22615 / 情報基盤センターデジタル・ライブラリ係 (内)22728

本郷地区統一の自転車・バイク登録制度

平成19年4月より本郷地区統一の自転車・バイク登録制度がスタートします。本郷構内（浅野キャンパス、弥生キャンパスを含む）で自転車・バイクを利用する方は、交通ルールを遵守するとともに、指定された場所に駐輪・駐車をしてください。なお、申請資格に該当しない方の駐輪・駐車は、原則許可しません。

1. はじめに

本郷構内に駐輪されている自転車は、ピーク時6,000台にのぼり、バイク（自動二輪車、原動機付自転車）と合わせると7,000台近くになります。これだけの駐輪自転車等があるにもかかわらず、構内には統一したルールはなく、駐輪スペースは需要の半分も満たしていない状況です。そのため、構内の自転車は溢れ、良好な歩行空間が確保されない問題が発生しています。また、卒業時に不用になった自転車等を放置していく者、点字誘導ブロック上に駐輪する者も多く、交通に対するマナーの悪さも目立っています。

本郷地区交通対策専門部会では、この状況を早急に解決する必要があると判断し、歩行環境改善対策として、

1. 本郷地区統一の自転車・バイク登録制度の実施
2. 駐輪場の新設・増設
3. 迷惑駐車に対する取締・整理の強化

を実施することを決定いたしました。そして、本郷構内の全ての交通に関する規則を改正し、平成19年度より、上記対策を正式に実施することとなったのです。

2. 新たな許可証の発行

平成19年度より新たに以下の許可証を発行いたします。許可証の有効期限は、交付の年の年度末までとします。なお、許可証は駐輪・駐車を許可するものであって、学内への入構

を制限するものではありません。

申請書の提出

※提出先は6～7ページ参照

様式 15-2

自転車駐輪許可申請書

平成 年 月 日

部局長 殿

申請者 所属部局

専攻・学科

ふりがな

氏名

身分証番号

身分 教員 職員 学部生 大学院生 その他()

様式 15

バイク駐車許可申請書

(自動二輪車・原動機付自転車)

平成 年 月 日

部局長 殿

申請者 所属部局

専攻・学科

ふりがな

氏名

身分証番号

身分 教員 職員 学部生 大学院生 その他()

住所

連絡先(内線) 緊急連絡先

車検証に記載された使用者の氏名 車両番号

主に利用する施設 (例)工学部1号館

申請理由 (該当する項目にチェックをしてください。)

通勤を、バイクを使用することで提出し、認定されている*1。

学生等で、通学距離が片道2 km以上である*2。

本学教職員及び学生等で、特段の理由がある。(理由)

※1 通勤距離の認定については、後日、本部にて行ないます。

※2 片道2 km以上とは、最も距離の長い学内施設のある通常の通学経路で算出した場合の距離です。

※3 バイク駐車許可証の有効期限は、交付の年の年度末までとします。

上記のとおり申請しますので、駐車許可をお願いします。

【遵守事項】

1. 東京大学本郷構内交通規則に従います。(東京大学のホームページ参照)
2. 駐車許可証(シール)は車体のよく見える位置に貼付します。
3. 駐車許可証は、他人に貸与又は譲渡いたしません。
4. 窃門、盗門を利用する際は、隠し手等で隠して入出構します。
5. 指定された場所以外には、駐車をいたしません。誘導ブロック(点字ブロック)の上には、駐車をいたしません。
6. 大学の重宝(宝)に利用するよう行為は、一切行ないません。
7. バイクが原因になったとき、構内に留置せず、自分の責任で処分いたします。
8. 構内での事故・盗難・損傷等については、大学に対して一切その責任を求めません。
9. 以上のことに違反した場合は、バイクの没収、許可証の取消等をされても異議申し立てをいたしません。

この欄は記入しないでください

申請にあたっては、上記のことを遵守することを誓約いたします。

管理区分

許可証番号

氏名

対象

自転車、電動アシスト自転車等

申請資格

- ・ 本学教職員及び学生等
- ・ 東京大学と締結した業務委託契約に係る者

申請書には所属、氏名、身分証番号、身分、連絡先、主に利用する施設を記載していただきます。

対象

自動二輪車、原動機付自転車等

申請資格

- ・ 本学教職員で、通勤届がバイクを使用することで提出し、認定されている者
- ・ 学生等で、通学距離が片道2 km以上である者
- ・ 本学教職員及び学生等で、特段の理由がある者

申請書には所属、氏名、身分証番号、身分、住所、連絡先、緊急連絡先、車検証に記載された使用者の氏名、車両番号、主に利用する施設、申請理由を記載していただきます。

許可証の交付

自転車駐輪許可証

例

平成19年度

自転車駐輪許可証

19010001

東京大学

部局名称は、管理区分の名称をそれぞれ記載しています。許可証は車体後方の見やすい位置に貼付してください。

バイク駐車許可証

例

平成19年度

バイク駐車許可証

19010001

東京大学

部局名称は、管理区分の名称をそれぞれ記載しています。許可証は車体のよく見える位置に貼付してください。

平成19年度はオレンジ色です。

3. 駐輪場（自転車・バイク用）

平成19年度からは、指定された場所のみ駐輪・駐車を許可します。交通ルールを遵守し、歩行者の邪魔にならないよう駐輪・駐車をしてください。また、バイクの長期駐車は一切

認めていません。大学を車庫代わりに利用するような行為はしないで下さい。なお、違反の態様が著しい車両等は、東京大学本郷構内交通規則に則り、撤去する場合があります。



4. 登録窓口

許可証は、以下の登録窓口にて発行しています。自転車・バイクを利用する方は、所属している部局の登録窓口にて申請を行ってください。もし管理区分にない部局の方が申請を行いたい場合は、現在研究室等がある建物を管理している登録窓口にて申請を行ってください。なお、本構内に研究室等がない方の申請は、施設部環境課にて行います。

※許可証の発行は、3月下旬より開始しています。

(例)

『理学部所属』の学生が『分生研』の研究室にいた場合
→理学部の登録窓口

『新領域所属』の学生が『理学部』の研究室にいた場合
→理学部の登録窓口

『先端研所属』の学生が『先端研』の研究室にいた場合
→施設部環境課の登録窓口

| 管理区分 | 所属部局 | 登録場所 | 問い合わせ先 | 内線 | |
|---------------------|----------|---------------------------------|-------------------|---------------------|-------|
| 01 | 総務 | 総務部 | 本部棟 7階 | 総務チーム | 22012 |
| 02 | 人事 | 人事部 | 本部棟 6階 | 総務・制度チーム | 22319 |
| 03 | 財務 | 財務部 | 本部棟 3階 | 総務・法規チーム | 22398 |
| 04 | 施設 | 施設部 | 第二本部棟 2階 | 環境企画チーム | 22255 |
| 05 | 学生 | 学生部 | 御殿下記念館 | 学生生活チーム | 21205 |
| 06 | 研協 | 研究協力部 | 本部棟 9階 | 研究協力課企画チーム | 22345 |
| | | 産学連携課 | 産学連携プラザ 1階 | 産学連携課総務チーム | 21489 |
| | | 留学生課 | 第二本部棟 1階 | 留学生課企画調査チーム | 22564 |
| | 留学生センター | | | | |
| 07 | 図書 | 附属図書館 | 図書館団地 附属図書館 2階事務室 | 管理係 | 22608 |
| 08 | 総博 | 総合研究博物館 | 総合研究博物館 1階事務室 | 総合研究博物館グループ | 22805 |
| 09 | 低温 | 低温センター | 低温センター 1階事務室 | 事務室 | 22852 |
| 10 | R I | アイソトープ総合センター | R Iセンター 1階事務室 | 庶務係 | 22881 |
| 11 | 環境 | 環境安全研究センター | 環境安全研究センター 1階事務室 | 事務室 | 22972 |
| 12 | 保健 | 保健センター | 安田講堂 1階 | 事務室 | 22574 |
| 13 | 情基 | 情報基盤センター | 情報基盤センター 3階事務室 | 総務係 | 22704 |
| 14 | 法 | 大学院法学政治学研究科・法学部 | 法文 1号館 2階事務室 | 庶務係 | 23105 |
| | | 大学院公共政策学連携研究部・教育部 | 第二本部棟 6階事務室 | 公共政策大学院係 | 21349 |
| 15 | 医 | 大学院医学系研究科・医学部 医学教育国際協力研究センター | 医 2号館本館 1階事務室 | 庶務係 | 23304 |
| 16 | 病院 | 医学部附属病院 | 管理・研究棟 3階事務室 | 庶務担当 | 31111 |
| 17 | 工 | 大学院工学系研究科・工学部 | 列品館 2階 | 総務担当（バイク担当） | 27792 |
| | | | 列品館 3階 | 施設担当（自転車担当） | 26062 |
| | | インテリジェント・モテリング・ラボラトリー 総合研究機構 | 工 9号館 1階 | 共同利用チーム 総合研究機構担当 | 27650 |
| | | 武田先端知ビル 大規模集積システム設計教育研究センター | 武田先端知ビル 1階 | 事務室 | 21162 |
| | | 社会基盤学専攻・社会基盤学科 | 工 1号館 1階 | 社会基盤・建築学専攻事務室 | 26084 |
| | | 建築学専攻・建築学科 | | | 26213 |
| | | 都市工学専攻・都市工学科 | 工 14号館 1階 | 都市・精密機械工学専攻事務室 | 26445 |
| | | 精密機械工学専攻・システム創成学科 | | | |
| | | 機械工学専攻・機械工学科 | 工 2号館 3階 | 機械系専攻事務室 | 26303 |
| | | 産業機械工学専攻・産業機械工学科 | | | |
| | | 環境海洋工学専攻・システム創成学科 | 工 3号館 1階 | 環境海洋工学専攻事務室 | 26534 |
| | | 航空宇宙工学専攻・航空宇宙工学科 | 工 7号館 1階 | 航空宇宙工学専攻事務室 | 26610 |
| | | 電気工学専攻・電気工学科 | 工 2号館 4階 | 電気系専攻事務室 | 26712 |
| | | 電子工学専攻・電子工学科 | | | |
| | | 物理工学専攻・物理工学科 | 工 6号館 1階 | 応物系専攻事務室 | 26802 |
| | | システム量子工学専攻・システム創成学科 | | | |
| | | 先端学際工学専攻 原子力国際専攻 | 工 12号館 1階 | システム量子工学・原子力国際専攻事務室 | 26963 |
| 地球システム工学専攻・システム創成学科 | 工 4号館 2階 | 地球・マテリアル工学専攻事務室 | 27090 | | |
| マテリアル工学専攻・マテリアル工学科 | | | | | |
| バイオエンジニアリング専攻 | 工 8号館 1階 | バイオエンジニアリング専攻事務室 | 21651 | | |

| 管理区分 | 所属部局 | 登録場所 | 問い合わせ先 | 内線 | | | |
|---------------|-------------|--|--------------------|--------------------------------|-------------------------|---------|-------|
| 17 | 工 | 応用化学専攻・応用化学科 化学システム工学専攻・化学システム工学科 化学生命工学専攻・化学生命工学科 | 工5号館1階 | 化学・生命系専攻事務室 | 27213 | | |
| | | 技術経営戦略専攻 | 工3号館1階 | 技術経営戦略学専攻事務室 | 28639 | | |
| | | 大学院人文社会系研究科・文学部（教職員） "（学部学生） "（大学院生） | 法文2号館1階事務室 | 会計係 教務係 大学院係 | 23725 23709 23712 | | |
| 19 | 理 | 大学院理学系研究科・理学部 | 理1号館（西棟）1階事務室 | 経理チーム | 24570 | | |
| | | 物理学専攻・物理学科 | 理1号館（中央棟）2階 | 事務室 | 24050 | | |
| | | 天文学専攻・天文学科 | 理1号館（中央棟）11階 | 事務室 | 24251 | | |
| | | 地球惑星科学専攻・地球惑星物理学科・地球惑星環境学科 | 理1号館（中央棟）8階 | 事務室 | 24598 | | |
| | | 化学専攻・化学科 | 化学本館1階 | 事務室 | 24321 | | |
| | | 生物化学専攻・生物化学科 | 理3号館2階 | 事務室 | 24401 | | |
| | | 生物科学専攻・生物学科 | 理2号館1階 | 事務室 | 24451 | | |
| | | 情報科学科 | 理7号館1階 | 事務室 | 24111 | | |
| | | スペクトル化学研究センター | 化学本館1階 | 事務室 | 24322 | | |
| | | 地殻化学実験施設 | 化学東館1階 | 事務室 | 24622 | | |
| | | 原子核科学研究センター | 理1号館（西棟）3階 | 事務室 | 24618 | | |
| | | ビッグバン宇宙国際研究センター | 理4号館6階 | 事務室 | 24169 | | |
| | | 遺伝子実験施設 | 理7号館6階 | 事務室 | 23034 | | |
| 素粒子物理国際研究センター | 理1号館（西棟）10階 | 事務室 | 24231 | | | | |
| 20 | 農 | 大学院農学生命科学研究科・農学部 生物生産工学研究センター アジア生物資源環境研究センター | 農3号館1階事務室 | 安全衛生管理係 | 25483 | | |
| | | 21 | 経済 | 大学院経済学研究科・経済学部 | 経済学研究棟5階事務室 | 教務・大学院係 | 25552 |
| | | 22 | 教育 | 大学院教育学研究科・教育学部 大学総合教育研究センター | 図書館団地 教育学部1階事務室 | 学生支援チーム | 23909 |
| 23 | 薬 | 大学院薬学系研究科・薬学部 | 薬学部本館1階事務室 | 会計チーム | 24712 | | |
| 24 | 学環 | 大学院情報学環・学際情報学府 | 図書館団地 情報学環1階事務室 | 総務係 | 25938 | | |
| 25 | 情理 | 大学院情報理工学系研究科 | 列品館3階 | 施設担当 | 26062 | | |
| 26 | 地震 | 地震研究所 | 地震1号館1階事務室 | 管理係 | 25674 | | |
| 27 | 東洋 | 東洋文化研究所 | 工8号館7階事務室 | 庶務係 | 25833 | | |
| 28 | 社研 | 社会科学研究所 | 図書館団地 社会科学研究所1階事務室 | 総務チーム | 24904 | | |
| 29 | 史料 | 史料編纂所 | 図書館団地 史料編纂所1階事務室 | 庶務係 | 25944 | | |
| 30 | 分生 | 分子細胞生物学研究所 | 分子細胞生物学研究所1階事務室 | 庶務係 | 27813 | | |
| 31 | 他 | その他 | 第二本館棟2階 | 施設部環境課環境企画チーム | 22255 | | |

交通ルール

本郷構内では、以下の交通ルールを遵守してご利用ください。

- ・ 東京大学本郷構内交通規則に従うこと。
- ・ 許可証は、他人に貸与又は譲渡しないこと。
- ・ 許可証を所定の位置に貼付すること。
- ・ 赤門、正門を利用する際は、降車し手で押して入出構すること。
- ・ 指定された場所以外には、駐輪・駐車をしないこと。
- ・ 誘導ブロック（点字ブロック）の上には、駐輪・駐車を行なわないこと。
- ・ 夜間に走行する際は、照明器具を点灯させること。
- ・ 大学を車庫代わりに利用するような行為を行なわないこと。（自転車以外）
- ・ 自転車・バイクが不用になったとき、構内に放置せず、自らの責任で処分すること。

交通監視整理員の導入 ～取締&整理の強化～

バイクの長期駐車、地下鉄利用者の無断駐輪などの交通問題が、構内の至る所で発生しています。4月からは、このような迷惑駐車に対する取締りを強化していきます。

また、自転車の駐輪問題に対しても、整理員を雇用（障害者雇用）し、駐輪場が常に効率的に利用できるような整理・整頓を行っていきます。

本郷地区交通対策専門部会 部会長 家田 仁
副部会長 大貫 静夫 下村 彰男
担当専門委員 大森 宣暁 鳩山 紀一郎

問い合わせ先：施設部環境課環境企画チーム
石橋 格司・戸田 宏之
電話番号：03-5841-2255（内線：22255）

NEWS

一般ニュース

総務部

平成19年度
学科・専攻等の設置等について

一般

理学部生物情報科学科の設置

平成19年4月から設置される、理学部生物情報科学科の設置目的・概要等は次のとおりである。

1. 事由

生物学と情報学の学際融合領域に位置する生物情報科学（バイオインフォマティクスとシステム生物学からなる）は、生命科学におけるゲノム研究と情報科学が融合することにより創出された全く新しい生物学であり、今後の生物学における中心的な学問領域になりつつある。

特に、これまでの生命科学は、主に少数の遺伝子を対象にしたものがほとんどであるが、生物情報科学においては、ゲノム研究などのDNA配列などに象徴されるように、膨大なデータを定量的に扱う点が従来の生命科学と大きく異なる。

このように生物情報科学は、生命科学と情報科学が融合することにより新しく生まれた領域であり、単に両者を組み合わせた領域ではない。

膨大な情報を解析する情報科学なしには、もはや生命科学は成立しない。生物情報科学の進歩は、21世紀の科学の発展と生命の謎を解くものと期待されているが、欧米と比較してわが国の教育研究体制は遅れをとりつつある。

一方、本学理学部には、生物化学科と情報科学科、さらに新領域創成科学研究科（情報生命科学専攻）などがあり、本学で教育研究を実施するうえで最適な教育環境が整っている。実際、理学部では、平成13年度から平成17年度まで文部科学省科学技術振興調整費の

採択を受けて「生物情報科学学部教育特別プログラム」を推進し、毎年多くの人材を輩出してきた実績もある。

受講人数及びカリキュラムは、既存の学科とまったく遜色がないものであり、受講した多くの学生が大学院へ進学後、生物情報科学の知識を用いてこれまでとは異なる研究を進めていることなどの事実は、この分野の基礎教育を学部段階から系統的に行う必要があることを明確に示している。したがって、本学理学部に本プログラムを継承・発展するものとして、生物情報科学科を設置するものである。

近年の多くの生物種における全ゲノム配列解読に伴い、生物関係の技術も急速に進歩している。また社会的にみても、電子情報技術は、インターネット、携帯電話などに見られるように人間社会のありかたを大きく変える速さで急激に進歩している。この両者を組み合わせた、生物情報科学は、生物の進化、発生など基礎研究の立場から重要な学問分野として認識されてきているばかりではなく、医薬・製薬企業等による、病気の治療、創薬などの実用的目的や、食品関連企業等による食糧・健康および環境などの研究開発への利用、および官公庁によるバイオ関連技術の情報学的開発などの分野での専門家や人材の養成を図る。

生物情報科学科では、生物情報科学学部教育特別プログラムの4年間及び平成18年度からの学内措置による生物情報科学学部教育プログラムの経験を踏まえて、新しい体制でより充実した講義・実験カリキュラムを編成して学部教育を行う。

特に、生物学、情報科学の基礎講義に加えて、新しい領域である生物情報科学（バイオインフォマティクス・システム生物学関連）の講義を中心に行う。同様に実験についても、それぞれの基礎実験だけでなく、コンピュータプログラミングとゲノム実験を融合させた生物情報科学実験を行い、生物情報科学の実践力の養成も重視する。

さらに、生物情報科学は日進月歩であり、既存の講義で対応しきれないような最先端の領域については、生物情報科学特別講義を開講して十分な教育を行い、学内の関連部局のみならず、理化学研究所、産業技術総合研究所などの連携によっても幅広くかつ深い教育環境を提供する。

2. 学位

学士（理学）

3. 入学定員

学士：10名

4. 開設年月日

平成19年4月1日

経済学部金融学科の設置

平成19年4月から設置される、経済学部金融学科の設置目的・概要等は次のとおりである。

1. 事由

金融システムの革新とグローバル化が進み、金融が社会・経済に決定的な影響を与えるようになるに伴い、金融分野で高度な専門能力と深い戦略眼を有する人材の供給が今日における緊急の課題になっている。これに応えるために、実業界での金融工学・会計等の専門家に加えて、現行の金融の仕組みの問題点等を意識して行動すべき経営者、政策担当者、さらに研究者を供給することを目的に、金融学科を設置する。この計画は東京大学が金融教育・研究の世界拠点を構築する「3本柱構想」の一つである。

日本経済は、製造部門においては、優れた人材を輩出し、世界をリードしてきたが、金融では人材の面で欧米に大きく遅れをとっており、中国、韓国、シンガポールなどの主要大学の取組に比較しても大きく劣後しつつある。アジア環太平洋地域が大きく金融革新の時代を迎えようとしている今日、既存の金融知識の活用だけでなく、金融の仕組みの再構築ができるような人材を供給することは、日本経済の発展にとって国家的な課題であり、急務を要する。

金融の教育内容は、資産運用、金融商品開発、企業金融、リスク管理など民間の経済主体が行う「金融戦略」に関するテーマと、金融規制、金融システムのデザイン、マクロ金融政策、通貨政策など政府や中央銀行が行う「金融政策」に関するテーマからなる。

欧米では、「金融戦略」はビジネススクールで、「金融政策」は経済学部で、という分類がなされているが、両者を同じプログラムで統一的に扱う金融学科の試みは、世界でも例を見ないものであり、本学科では、確かな戦略眼と広い視野を備えた真の金融界のリーダーを育成する。

今日の金融経済学研究の理論的フロンティアでは、「経済モデル」のイノベーションが重要な関心事になっているが、そうした基礎理論の構築にも数理的能力が不可欠である。こうした性格を持つ金融の分野で質の高い教育を行うため、文科・理科の区別なく学生を受け入れ、経済学のディシプリンを重視し、社会科学と数理学の両方を教育する。

2. 学位

学士（経済学）

3. 入学定員

学士：70名

4. 開設年月日

平成19年4月1日

大学院経済学研究科企業・市場専攻の名称変更

平成19年4月から経済学研究科企業・市場専攻を経済学研究科経営専攻に名称変更する目的・概要等は、次のとおりである。

1. 事由

近年、経営学の研究者に対するニーズはこれまでにない高まりをみせてきており、日本国内に多くのビジネススクールの新設や、公共政策さらには技術経営や教育経営といった隣接分野でも経営学の優秀な研究者が求められている。このことは、いまや研究対象分野にかかわらず、経営学のフロンティアを切り開く能力が必要とされ、原点回帰といえるほどに経営学研究の方法論を身に付けた研究者の養成が強く求められていることを示すものである。

そこで、東京大学によりふさわしい教育研究組織として、フィールドに出て科学的手続きに則った研究を行う能力のある経営学研究者を育成する目的で、従来のように研究対象分野を示すのではなく、これからは新しい研究の地平を切り開く経営学の研究方法論を示すために、企業・市場専攻を経営専攻に名称変更し、経営学のフィールドリサーチ方法論の原点を徹底的に教育・研究する専攻であることを明確化するものである。

2. 名称変更の時期

平成19年4月1日

3. 新名称の対象年次

1年次

在校生等への対応としては、経営専攻への名称変更は平成19年度の大学院入学者から適応し、学年進行するため、在校生は現在の企業・市場専攻のままで影響はない。しかし、在校生に対しては、名称変更によって混乱を招かないように、研究科内で説明会等を開催し周知を図り、支障のないよう対処する。

大学院医学系研究科公共健康医学専攻の設置

平成19年4月から設置される、医学系研究科公共健康医学専攻の設置目的・概要等は次のとおりである。

1. 事由

全国の医学系修士課程が、看護学や基礎医学・生命科学分野に専門分化して行く中で、公衆衛生学の高度専門職業人養成についての取り組みは遅れている。すでに開設されている京都大学、九州大学などの修士課程をすべて併せても、わが国の公衆衛生領域の修士課程の総定員は60人に満たない。

欧米では、医師、薬剤師、看護師などの専門教育課程とは独立する形で、公衆衛生学の大学院教育が古くから制度化されている。公衆衛生学の専門教育が最も発展している米国では、およそ30の公衆衛生学大学院（School of Public Health）に、毎年約7,000人が入学している。入学者の背景は様々であり、文系・理系すべての学部卒業生だけでなく、医師、獣医師、看護師、

薬剤師など職歴のある社会人の入学者も少なくない。修了者の進路も多様で、行政（国、自治体、国際機関）、企業・自治体の試験研究機関、医療機関、保険団体、医薬品産業、シンクタンク・コンサルタント業などで高度専門職業人として働く者や、博士課程に進み、研究者、教育者、より高度な専門家になる者などがある。しかも入学者の17%（約1,200人）は海外からの留学生が占めており、行政や企業からの派遣も含めて日本からの留学生も少なくない。

さらに、わが国における医学科、歯学科等卒業生を対象にした卒業教育は、研究者育成を目的とした医学（歯学）博士課程のみであり、急速に高まりつつある医学・歯学分野の政策形成や組織運営、医療安全管理等の専門家を養成する高等教育の場はほとんど存在しない。

急速に進行する少子高齢化、地方分権、新興・再興感染症・バイオテロの発生、労働現場における過労死・自殺等の問題、医療事故増加、医療経営環境悪化などに対応すべく、人間集団の健康を対象にした分析手法を身に付け、保健医療に関わる社会制度を体系的に理解し、政策立案・マネジメント能力に優れたパブリックヘルス・マインドを持った高度専門職業人の育成が急務である。具体的には、保健医療行政、健康危機管理、地域・職域の健康管理・ヘルスプロモーション、医療事故対策、医療・介護・保険組織の運営・マネジメント、医療技術の科学的評価（EBM）、保健医療分野におけるコンサルティングなどにおいて、指導的・管理的役割を遂行できる保健医療専門家が求められている。本専門職大学院は、このような社会的ニーズに応えるものである。

2. 学位

公衆衛生学修士（専門職）

3. 入学定員

専門職学位課程：30名（1年制8名、2年制22名）

4. 開設年月日

平成19年4月1日

研究協力部

卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会

一般

2月14日（水）18時から、東天紅上野店において「東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会」が開催された。

この会は、本学の学部を卒業または大学院修士課程・博士課程を修了する予定の外国人留学生及び留学生支援団体関係者等と総長ほか役員をはじめとする本学教職員とが一同に会して親睦を深めることを目的としており、会には留学生約150名に加え、日頃から留学生をサポート

トいただいている支援団体、大使館及び自治体等関係者、ならびに本学教職員の総勢約360名の参加者があった。

会は総長の挨拶に引き続き、留学生支援団体の代表として榎山奨学財団亀岡エリ子理事長より奨学制度の趣旨等に因んだ御挨拶をいただいた。続いて本年3月に工学部卒業予定のシャウイン・ウォンパヤットさん、大学院新領域創成科学研究科修士課程修了予定のトゥア・ナモラ・ナインゴランさん、大学院農学生命科学研究科博士課程修了予定のル・シャンさんの3名から、日本での経験、研究生活などにちなんだ流暢な日本語によるスピーチがあったのち、古田理事・副学長による東京大学学友会案内及び乾杯の音頭で幕を開けた。会場では総長と記念写真を撮る学生等の列ができるなど、終始和やかな雰囲気にもまれ、予定時間を過ぎた19時30分、坂野 仁留学生センター長（大学院理学系研究科・教授）から閉会の挨拶があり、会は盛会のうちに終了した。



総長、役員及び留学生センター長



スピーチを行う榎山奨学財団亀岡理事長と留学生代表



環境安全本部

「春の火災予防運動」に伴う消防演習等、実施される

一般

3月1日（木）からの「春の火災予防運動」に伴い、本郷消防署は、本学環境安全本部の中西友子本部長を「一日消防署長」に、工学系研究科の大学院生3名（鈴木佐夜香さん、姉崎教史さん、河村智史さん）を「一日消防官」に迎え、3月5日（月）10時から、本郷キャンパスの工学部2号館及び安田講堂にて、「立入検査」及び「消防演習」を実施した。

大貫本郷消防署長から、「一日消防署長」を委嘱された中西本部長は、本郷消防署員から「立入検査」の開始報告を受けたあと、「一日消防官」たちとともに、工学部2号館を巡回して、消火器、屋内消火栓、避難口誘導灯等の消防設備、防災センター（中央監視室）等による同館の維持管理状況について点検した。続く「消防演習」では、学生カップルが安田講堂からの出火を発見し、たまたま近くを通りかかった環境安全本部の事務職員とともに、初期消火にあたるが鎮火できずに、携帯電話から本郷消防署に通報するという想定で行われた。本郷消防署からは、ポンプ車4隊、はしご車1隊、指揮隊1隊、消防団1隊が出動し、「一日消防署長」による指揮・号令のもと、安田講堂に向かって合計6口のホースから、約30秒間の一斉放水を行い、「春の火災予防運動」についての学内アピールを大々的に行った。



38年ぶりに一斉放水される安田講堂

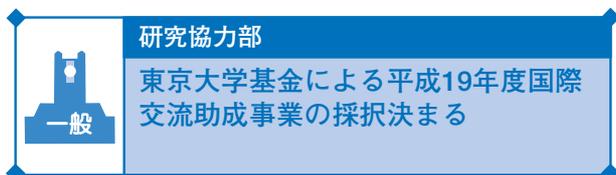


工学部2号館における立入検査



「一日消防署長」と「一日消防官」たち
(左から順に、中西本部長、鈴木佐夜香さん、姉崎教史さん、河村智史さん)

なお、春休み期間中に実施されたこともあって、見学に訪れた学部学生や大学院生のギャラリーは決して多いものではなかったが、東大闘争時の「安田砦の攻防戦」（1969年1月）を知っている年輩の教職員たちは往時を振り返り、38年ぶりに本格的な放水を浴びる安田講堂をしっかりと見守っていた。今回の「消防演習」は、NHKテレビや朝日新聞をはじめとするメディアにも取り上げられた。「消防演習」を終えて、中西本部長は「全学を挙げて東大を守っていききたい」と感想を述べた。



東京大学基金による平成19年度国際交流助成事業下記4件について、以下のとおり助成することを決定した。
各助成事業募集要項等は → 関連ウェブサイト URL http://www.u-tokyo.ac.jp/res02/d03_05_01_j.html

1. 平成19年度 海外学術交流拠点設置・運営経費助成事業

| 部局名 | 代表者職・氏名 | | 海外拠点の名称 | 設置(予定)場所 |
|----------------|---------------|-------|---------------------------------|--|
| 医学教育国際協力研究センター | センター長 (教授) | 加我 君孝 | 東京大学医学教育共同研究センター | カブール医科大学内 (アフガニスタン) |
| 大学院医学系研究科 | 助教授 | 黒岩 宙司 | メコン河流域の環境に配慮した公衆衛生活動の実現に向けた海外拠点 | 中央拠点：ラオス医科大学大学院公衆衛生学教室内(ラオス) (地域拠点：ラオス側カウンターパートが選定。申請時点の予定ではルアンナムタ県のヘルスセンター内) |
| 生産技術研究所 | 教授 | 魚本 健人 | 都市基盤安全工学アジア研究センター | バングラディッシュ工科大学工学部土木工学科(BUET ダッカ、バングラディッシュ) |

2. 平成19年度 東京大学シンポジウム開催経費助成事業

| 部局名 | 開催責任者職・氏名 | | シンポジウム名称 | 開催(予定)場所 |
|--------------|-----------|--------|--|-----------|
| 生物生産工学研究センター | センター長(教授) | 五十嵐 泰夫 | 東京大学創立130周年記念国際シンポジウムー環境生命科学における微生物・植物バイオテクノロジーの最先端ー(仮称) | 山上会館 |
| 大学院総合文化研究科 | 教授 | 木畑 洋一 | 東アジア四大学フォーラムー共通文化の創造をめざして | 駒場キャンパス |
| ※大学院情報学環 | 学環長(教授) | 吉見 俊哉 | デジタルメディアの社会理論 次世代社会構想のための世界会議 | 安田講堂・工学部等 |
| 国際連携本部 | ASNET推進室長 | 羽田 正 | アジアと語る希望・幸福：東京大学の行動 | 安田講堂 |

※大学院情報学環申請の「デジタルメディアの社会理論 次世代社会構想のための世界会議」は、「堀場国際会議」の企画事業にも採択されたため、東京大学シンポジウム開催経費助成を辞退することとなった。

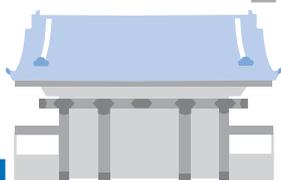
3. 平成19年度 ジョイント・フォーラム開催経費助成事業

| 部 局 名 | 開催責任者職・氏名 | | フォーラム名称 | 開催地（開催国） |
|-------|-----------|-------|--|-------------------|
| 地震研究所 | 教授 | 加藤 照之 | APRU/AEARU 地震・津波・火山・防災に関する学術シンポジウム「地震・津波・火山噴火とその災害の諸相の多様性」 | ジャカルタ (インドネシア) |

4. 平成19年度 長期派遣経費助成事業

| 部 局 名 | 申請者職・氏名 | | 受入研究機関 派遣期間 | 研究題目 |
|---------------------|---------|-------|--|---|
| 総合研究博物館 | 助手 | 佐々木猛智 | ミュンヘン動物学博物館 (ドイツ) 19.11.1～20.3.1 | 超深海性微小貝類の 多様性の解明 |
| アジア生物資源環境 研究センター | 助教授 | 鴨下 顕彦 | ワーゲンニンゲン大学 生産生 態学グループ (オランダ) 19.12.17～20.3.14 | モデルによる代替作 物生産量評価と土地 利用選択評価－熱帯 の乾季稲作と都市近 郊水田冬作の事例－ |
| 医学部附属病院 | 助手 | 狩野章太郎 | Laboratory of Auditory Neurophysiology, Dept. of Neuroscience, University of Leuven (K.U.Leuven) (ベルギ ー) 19.5.14～19.8.4 | 中枢聴覚路における 両耳音刺激情報の統 合及び時間情報処理 の電気生理学的解 析－マカクザル中脳 における両耳間時間 差の解析機構を題材 に |
| 大学院理学系研究科 | 助手 | 萩原 成騎 | ニューカッスル大学土木工学及 び地球科学科 (英国) / 北カト リック大学地質科学科 (チリ) 19.9.6～19.11.14 | グアノ (海鳥やコウ モリの糞) を起源と するチリ硝石及び燐 鉱石の生成過程にお ける微生物の役割に ついての有機地球化 学的研究 |
| 大学院総合文化研究科 | 助教授 | 甚野 尚志 | コンスタンツ大学 (ドイツ) 19.9.3～19.11.17 | 中世後期のコンスタ ンツにおける司教権 力と都市共同体 －教会政治史的な視 点からの考察－ |

部局 ニュース



退職教員の紹介

平成19年3月31日をもって本学を去られる予定の先生方を紹介します。紹介記事及び写真は、ご本人の了解のもと、ご提供いただいたものを掲載します。

大学院法学政治学研究科・法学部

伊藤 眞 教授

(本学在職期間 昭和43年4月～昭和46年5月、
平成5年4月～平成19年3月)



昭和42年3月 法学部卒業
昭和46年6月 助教授
(名古屋大学)
昭和58年10月 助教授(一橋大学)
昭和60年4月 教授(一橋大学)
平成5年4月 教授(大学院法学
政治学研究科)

所属：民事手続法

専門分野：民事訴訟法

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 『民事訴訟法【第3版再訂版】』(有斐閣、2006)
- 『破産法【第4版補訂版】』(有斐閣、2006)
- 『法律学への誘い【第2版】』(有斐閣、2006)

江頭 憲治郎 教授

(本学在職期間 昭和44年7月～平成19年3月)



昭和44年6月 法学部卒業
昭和47年10月 助教授(法学部)
昭和58年4月 教授(法学部)
平成3年4月 教授
(大学院法学政治学研究科)

所属：企業法

専門分野：会社法、商取引法、証券取引法

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 『会社法人格否認の法理』(東大出版会、1980)
- 『結合企業法の立法と解釈』(有斐閣、1995)
- 『商取引法(第4版)』(弘文堂、2005)
- 『株式会社法』(有斐閣、2006)

落合 誠一 教授

(本学在職期間 昭和49年4月～昭和52年3月、
平成2年4月～平成19年3月)
昭和43年3月 法学部卒業
昭和49年3月



大学院法学政治学研究科
修士課程修了
昭和52年4月 助教授(成蹊大学)
昭和56年4月 教授(成蹊大学)
平成2年4月 教授(法学部)

平成3年4月 教授(大学院法学政治学研究科)

所属：企業法

専門分野：商法

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 『運送責任の基礎理論』(弘文堂、1979)
- 『運送法の課題と展開』(弘文堂、1994)
- 『消費者契約法』(有斐閣、2001)
- 『商法』(放送大学教育振興会、2003)など

大学院医学系研究科・医学部

井原 康夫 教授

(本学在職期間 平成3年1月～平成19年3月)



昭和46年3月 医学部卒業
昭和46年6月
医学部附属病院第一内科研修医
昭和48年4月
医学部脳研究施設臨床部門
(神経内科)非常勤医員
昭和49年9月

国立療養所下志津病院厚生技官

昭和50年1月 都立養育院附属病院神経内科主事
昭和53年1月 国立療養所東京病院神経内科厚生技官
同5月 医学部脳研究施設神経内科助手
昭和56年4月 米国Harvard大学(Mailman Research
Center, McLean Hospital) Research
Associate
昭和57年9月 医学部脳研究施設神経内科
講師(外来医長)
昭和59年10月 東京都老人総合研究所生理学部
臨床第2生理研究室 室長
平成2年8月 東京都老人総合研究所生理老化学研究系
神経生理部門 室長(改称)
平成3年1月 医学部脳研究施設・脳病理学部門 教授
平成9年4月 大学院医学系研究科脳神経医学専攻
基礎神経医学講座神経病理学分野教授
所属：脳神経医学専攻基礎神経医学講座神経病理学分野
専門分野：アルツハイマー病
研究内容(代表的な著書や論文等)：
「脳はどこまでわかったか」朝日選書 2005

牛島 廣治 教授

(本学在職期間 平成7年4月～平成19年3月)



昭和47年3月医学部医学科卒業後、東京大学附属病院小児科、帝京大学病院小児科、米国アラバマ大学微生物学室等に勤務。昭和62年7月から国立予防衛生研究所外来性ウイルス、エイズウイルス室、腸内ウイルス室勤務(室長)。平成5年1月から国立公衆衛生院衛生微生物学教室(部長)、平成7年5月から医学部健康科学・看護学科と平成9年4月から大学院医学系研究科国際保健学専攻発達医科学教室勤務(教授)。

所属：国際保健学専攻・国際生物講座・発達医科学分野
専門分野：母子保健学、ウイルス(感染症)学、
国際保健学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

(単行本)

「ウイルス性下痢症とその関連疾患」新興医学出版
平成7年

「小児保健福祉学」新興医学出版 平成13年
(論文) PubMed ushijima h で検索ください

加我 君孝 教授

(本学在職期間 平成4年1月～平成19年3月)



昭和46年3月 医学部卒業
昭和61年3月
帝京大学医学部助教授
平成4年1月 教授(医学部)
平成9年4月 教授(大学院医学系研究科)(現職)
平成12年4月 医学教育国際協力研究センター長(現職)

所属：外科学専攻 耳鼻咽喉科学分野

専門分野：耳鼻咽喉科学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

聴覚医学、耳科学、めまい平衡医学の基礎と臨床、
小児耳鼻科、認知神経科学、心身医学、医学教育。

(主要編著書)

『ABRハンドブック』、『中枢性聴覚障害の基礎と臨床』、『新生児聴覚スクリーニング』、『めまいの構造』(金原出版)など。訳書に『変貌する日本の医学教育—米国医学教育者の提言—』(金原出版)がある。

加藤 進昌 教授

(本学在職期間 平成10年7月～平成19年3月)



昭和47年3月 医学部 卒業
昭和50年7月 国立精神衛生研究所精神薄弱部 研究員
昭和53年5月 国立精神・神経センター神経研究所 研究員
昭和54～56年
カナダ マニトバ大学医学部
生理学教室 留学 MRC Fellow

昭和58年4月 国立精神・神経センター神経研究所
研究室長

昭和61年7月 滋賀医科大学精神医学教室助教授

平成8年4月 同 教授

平成10年7月 医学部附属病院精神神経科教授
(大学院医学系研究科 精神医学分野)

平成13年4月～15年3月 医学部附属病院 病院長

所属：精神神経科・精神医学分野

専門分野：精神医学、神経内分泌学、児童精神医学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Nobumasa Kato (Ed.)：

「The Hippocampus: Functions and Clinical
Relevance」, Elsevier Science,1996

N Kato, M Kawata, R.K.Pitman (Eds)：

「PTSD Brain Mechanisms and Clinical Implications」
Springer, 2006

加藤進昌、神庭重信編

「テキスト 精神医学第3版」南山堂、2007

幕内 雅敏 教授

(本学在職期間 平成6年4月～平成19年3月)



昭和48年3月 医学部卒業
昭和63年4月
国立がんセンター病院外來部
外科医長

平成元年4月 同手術部長

平成2年4月 信州大学医学部
第一外科教授

平成6年4月 医学部第二外科教授
平成9年4月 同肝胆膵外科、人工臓器・移植外科教授
(現職)

所属：外科学専攻・臓器病態外科学講座・肝胆膵外科学
分野、人工臓器移植外科分野

専門分野：肝胆膵外科・移植外科

研究内容(代表的な論文など)：

超音波診断技術の肝切除への応用: Makuuchi M,
Hasegawa H, Yamazaki S:

Ultrasonically guided subsegmentectomy. Surg
Gynecol Obstet 161: 346-350,1985

世界初の成人肝移植: Hashikura Y, Makuuchi M, Kawasaki S, Matsunami H, Ikegami T, Nakazawa Y, Kiyosawa K, Ichida T.

Successful living-related partial liver transplantation to an adult patient. Lancet. 1994 May 14;343 (8907) :1233-4.

大学院工学系研究科・工学部

長澤 泰 教授

(本学在職期間 昭和64年1月～平成19年3月)



昭和43年3月 工学部卒業
昭和43年4月 芦原義信建築設計研究所所員
昭和49年1月 厚生省病院管理研究所研究員
昭和53年6月 北ロンドン工科大学医療施設計画研究所大学院修了、Dip. HFP取得

昭和55年4月 厚生省病院管理研究所主任研究官
昭和62年5月 工学博士(東京大学)
昭和64年1月 工学部(助教授)
平成6年7月 工学部(教授)
平成8年4月 教授(大学院工学系研究科)(現職)
所属: 建築学専攻・建築計画学講座・建築計画学分野
専門分野: 医療・福祉施設計画・建築計画理論
研究内容(代表的な著書や論文等):
「建築計画」市ヶ谷出版、2005
Global Hospital in 2050—A Vision, ELSEVIER ACADEMIC PRESS, 2004
建築が病院を健院に変える, 彰国社、2002

仁田 旦三 教授

(本学在職期間 平成8年4月～平成19年3月)

昭和42年3月 京都大学工学部電気工学第二学科卒業
昭和44年3月 京都大学大学院工学研究科電気工学第二専攻修了
昭和47年3月 京都大学大学院博士課程単位取得退学
昭和47年4月 京都大学工学部助手
昭和55年4月 京都大学工学部助教授
平成8年4月 大学院工学系研究科教授(現職)
所属: 電気工学専攻・電気エネルギー工学講座・極限電気エネルギー工学領域
専門分野: 超電導電力機器学・回路網理論
研究内容(代表的な著書や論文等):
「超電導エネルギー工学」(単行本, 編著)オーム社2006
"Consideration on Damper Cylinder Design for Effectiveness of Superconducting Generator", IEEE Trans. on Applied Superconductivity, Vol.16 No.2, PP.1493-1596, 2006.
"Conceptual Design for Transformer Type SC-FCL

by use of Silver Sheathed BSCCO wire, Superconducting Technology, Vol.19, No.3, Journal on Physics: Conference Series, Vol.43, PP.971-974, 2006.

「大容量円筒型同期機固定子巻線端部電磁力電磁力の研究」電気学会論文誌D, 126巻, 12号, pp.1608-1615, 2006

藤原 毅夫 教授

(本学在職期間 昭和45年4月～昭和52年3月、



昭和59年4月～平成19年3月)
昭和42年3月 工学部卒業
昭和44年3月 大学院工学系研究科修士課程修了
昭和45年4月 工学部助手
昭和48年4月 工学博士(東京大学)
昭和52年4月 筑波大学物質工学系助教授

昭和59年4月 工学部助教授
平成2年4月 同 教授
平成7年4月 大学院工学系研究科教授(現職)
所属: 物理工学専攻・工業力学講座
専門分野: 固体物性理論、固体電子構造論、計算物理学
研究内容(代表的な著書や論文等):
固体電子構造(朝倉書店,1999)
Quasicrystals(Springer-Verlag, 1990)
線形代数(岩波書店,1996)

湯原 哲夫 教授

(本学在職期間:平成14年7月～平成19年3月)



昭和43年 工学部船舶工学科卒業
昭和45年 大学院数物系研究科船舶工学専攻修了
昭和45年 三菱重工業(株)技術本部入社
平成4年 長崎研究所強度研究室長
平成7年 同次長

平成9年 横浜研究所長
平成14年7月 東京大学教授
所属: 環境海洋工学専攻実現化学講座(産業技術開発領域)
専門分野: 海洋工学、構造強度学、技術経営学、エネルギー技術戦略
研究内容(代表的な著書や論文等):
「船首波浪衝撃現象と構造設計法の研究」(学位論文、論文多数で造船学会賞)
「高速増殖炉の高温構造設計基準の開発」
「地震荷重下における原子炉格納容器の座屈崩壊挙動の研究」(原子力学会賞)
ゼミナール「エネルギー新世紀」日本経済新聞経済教室に43回連載 平成15年2月～4月

大学院人文社会系研究科・文学部

平野 嘉彦 教授

(本学在職期間 平成9年4月～平成19年3月)



昭和42年3月
京都大学文学部文学科卒業
昭和44年3月
京都大学大学院文学研究科
修士課程修了・文学修士
昭和46年3月 同博士課程中退
昭和46年4月
大阪府立大学助手(教養部)

昭和50年4月 同志社大学専任講師(文学部)
昭和54年4月 同志社大学助教授(文学部)
昭和63年4月 京都大学助教授(教養部)
平成4年10月 京都大学教授(総合人間学部)
平成9年4月 教授(大学院人文社会系研究科)(現職)
所属：欧米系文化研究・ゲルマン語圏言語文化・
ドイツ語ドイツ文学

専門分野：ドイツ語ドイツ文学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 「プラハの世紀末」(単行本)岩波書店、1993
- 「カフカ」(単行本)講談社、1996
- 「獣たちの伝説」(単行本)みすず書房、2001
- 「ツェラーンもしくは狂気のフローラ」(単行本)未来社、2002
- 「マゾッホという思想」(単行本)青土社、2004

藤田 一美 教授

(本学在職期間 1980年10月～2007年3月)

1968年3月 法学部卒業
1968年4月 大学院人文科学研究科
美学藝術学専門課程修士課程入学
1972年3月 大学院人文科学研究科
美学藝術学専門課程博士課程退学
1980年10月 文学部(助教授)
1991年12月 文学部(教授)
1994年4月 教授(大学院人文社会系研究科)(現職)
所属：基礎文化研究専攻美学藝術学講座
専門分野：西洋古典哲学美学、ドイツ近現代哲学美学
研究内容(代表的な著書や論文等)：
「藝術の存在論」(単著)、多賀出版、1995
(論文)
「存在論としての価値論」1-3、1995-1996
「ミーメシスとしてのポイエシスにおける
<エイコーン>」1-2、美学藝術学研究15&19、1997&2001
“Die ontologisch-Wertwissenschaftliche Weg zum
Grund der Weltwissenschaft I”, JTLA21, 1997
「カロカガティア系譜考」1-2、美学藝術学研究20-21、
2002-3
「啓蒙思想における<為国家之用>の論理—西周の啓
蒙哲学における美学思想」1-2、美学藝術学研究22-23、
2005-6

“Mimesis von Menschen und Mimesis von Taten”,
JTLA28, 2005

“Mnthanein als heuristische Identifikation in Poetica
des Aristoteles, JTLA30, 2006

「詩論の系譜」1、美学藝術学研究25, 2007

大学院理学系研究科・理学部

梅澤 喜夫 教授

(本学在職期間 平成4年4月～平成19年3月)



昭和42年3月 理学部卒業
昭和47年3月
大学院理学系研究科修了
理学博士
昭和59年4月
助教授(北海道大学理学部)
昭和50年4月
教授(北海道大学理学部)

平成4年4月 教授(理学部)

平成5年4月 教授(大学院理学系研究科)(現職)

所属：化学専攻 無機・分析化学講座 分析化学研究室
専門分野：分析化学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1. Imaging diacylglycerol dynamics at organelle membranes. M. Sato, Y. Ueda and Y. Umezawa, Nature Methods, 3, 797-799 (2006).
2. Complementary base-pair-facilitated electron tunneling for electrically pinpointing complementary nucleobases. T. Ohshiro and Y. Umezawa, Proc. Natl. Acad. Sci., USA, 103, 10-14 (2006).
3. Imaging the nanomolar range of nitric oxide with an amplifier-coupled fluorescent indicator in living cells. M. Sato, N. Hida and Y. Umezawa, Proc. Natl. Acad. Sci., USA, 102, 14515-14520 (2005).
4. A Fullerene Molecular Tip Can Detect Localized and Rectified Electron Tunneling within a Single Fullerene-Porphyrin Pair. T. Nishino, T. Ito and Y. Umezawa, Proc. Natl. Acad. Sci., USA, 102, 5659-5662 (2005).
5. High-throughput sensing and non-invasive imaging of protein nuclear transport by using reconstitution of split Renilla luciferase. S. B. Kim, T. Ozawa, S. Watanabe and Y. Umezawa, Proc. Natl. Acad. Sci., USA, 101, 11542-11547 (2004).
6. Production of PtdInsP3 at endomembranes is triggered by receptor endocytosis. M. Sato, Y. Ueda, T. Takagi, and Y. Umezawa, Nature Cell Biol., 5, 1016-1022 (2003).
7. A Genetic Approach to Identifying Mitochondrial Proteins. T. Ozawa, Y. Sako, M. Sato, T. Kitamura and Y. Umezawa, Nature Biotechnol., 21, 287-293 (2003).

8. Fluorescent Indicators for Imaging Protein Phosphorylation in Single Living Cells. M. Sato, T. Ozawa, K. Inukai, T. Asano, and Y. Umezawa, *Nature Biotechnol.*, 20, 287-294 (2002).
9. 「分析化学」梅澤喜夫, 岩波書店 (1998).

西郷 薫 教授

(本学在職期間 昭和63年6月～平成19年3月)



昭和42年3月 理学部卒業
昭和47年3月
大学院理学系研究科
単位取得退学 (理学博士)
昭和47年4月
三菱化成生命科学研究所研究員
昭和56年12月
九州大学助教授 (医学部)

昭和63年6月 教授 (理学部)

平成5年4月 教授 (大学院理学系研究科) (現職)

所属: 生物化学専攻・生物化学大講座

専門分野: 分子生物学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

- Proc.Natl.Acad.Sci.USA* 79,4143-4147,1982.
Nature 302, 119-124,1983. *Nature* 312, 659-661,1984.
Nature 310, 332-333,1984. *Nature* 315,691-692,1985.
Nature 315, 691-692,1985.
Proc.Natl.Acad.Sci.USA 88,4343-4347, 1991.
*Genes Dev.*6,1005-1018,1992.
Development 117, 751-761,1993.
*Development*152,527-536,1996.
Genes Dev. 10,1645-1656,1996.
Development 124, 2119-2128,1997.
Development 126,1457-1466,1999.
*J.Cell Biol.*148, 101-114,2000.
*Development*127,769-778,2000.
Curr.Biol. 13, 41-46, 2003.
*Nucl.Acids Res.*32,936-948,2004.

長田 敏行 教授

(本学在職期間 昭和48年7月～昭和54年4月、



平成2年4月～平成19年3月)
昭和43年3月 理学部卒業
昭和48年3月
大学院理学系研究科修了
理学博士
昭和48年7月 助手 (教養学部)
昭和54年5月
名古屋大学理学部教授

昭和58年12月 助教授 (岡崎国立共同研究機構・基礎生物学研究所)

平成2年4月 教授 (理学部)

平成5年4月 教授 (大学院理学系研究科) (現職)

平成7年4月～平成13年3月 附属植物園園長

平成17年4月～平成19年3月 附属植物園園長

所属: 生物科学専攻・植物科学講座

専門分野: 植物生理学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

「植物プロトプラストの細胞工学」講談社サイエンスイフィク、1995

「植物工学の基礎」(単行本、編著) 東京化学同人、2002
「Tobacco BY-2 Cells」(単行本、編著)

Biotechnology in Agriculture & Forestry, Vol. 53 (2004), Vol. 58 (2006) Springer-Verlag

奈良坂 紘一 教授

(本学在職期間 昭和48年4月～平成19年3月)



昭和42年3月
東京工業大学理工学部卒業
昭和47年3月
東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了・工学博士
昭和50年2月 講師 (理学部)
昭和53年6月 助教授 (理学部)
昭和62年6月 教授 (理学部)

平成5年4月 教授 (大学院理学系研究科) (現職)

所属: 化学専攻有機化学講座 有機合成化学研究室

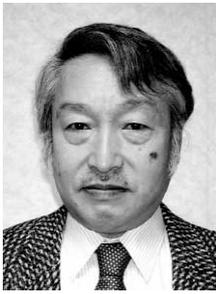
専門分野: 有機合成化学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

1. Chiral Titanium Complex in Asymmetric Construction of Carbon Skeletons. K. Narasaka, in "Stereocontrolled Organic Synthesis, A Chemistry for the 21st Century Monograph", IUPAC, ed. by B. M. Trost, Blackwell Science, London (1994), pp. 17-36.
2. Generation of Radical Species by Single-Electron-Transfer Reactions and their Application to the Development of Synthetic Reactions. T. Mikami and K. Narasaka, in "Advances in Free Radical Chemistry", ed. by S. Z. Zard, JAI Press, Greenwich (1999), Vol. 2, pp. 45-88.
3. Theoretical and Experimental Study on the In-Plane SN₂-Type Substitution Reaction of Haloalkenes with Inversion of Configuration at the sp² Carbon, K. Ando, M. Kitamura, K. Miura, and K. Narasaka, *Org. Lett.*, 6, 2461-2463 (2004).
4. Amination with Oxime, K. Narasaka and M. Kitamura, *Eur. J. Org. Chem.*, 2005, 4505-4519.
5. Synthesis of (-)-Sordarin. S. Chiba, M. Kitamura, and K. Narasaka, *J. Am. Chem. Soc.*, 128, 6931-6937 (2006).

濱野 洋三 教授

(本学在職期間 昭和47年10月～平成19年3月)



昭和42年3月 理学部卒業
昭和47年3月
大学院理学系研究科修了・
理学博士
昭和59年1月
助教授(地震研究所)
平成元年8月 教授(理学部)
平成5年4月 教授(大学院理学
系研究科)(現職)

所属：地球惑星科学専攻地球惑星システム科学講座

専門分野：地球及び惑星内部物理学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

地球の初期進化、古地磁気学・地球磁場変動の起源、
地球内部ダイナミクス

Hamano, Y., Ar degassing model of Mars, Nature, 266, 41-42, 1977.

Hamano, Y. and Ozima, M., Earth-atmosphere evolution model based on Ar isotopic data, in "Terrestrial Rare Gases", Cent. Acad. Publ. Japan, 155-171, 1978.

Hamano, Y., An experiment on the post-depositional remanent magnetization in artificial and natural sediments, Earth Planet. Sci. Lett., 51, 221-232, 1980.

Tosha, T. and Hamano, Y., Paleomagnetism of Tertiary rocks from the Oga Peninsula and the rotation of Northeast Japan, Tectonics, 7, 653-662, 1988.

*Ohno, M. and Hamano Y., Geomagnetic poles over the past 10,000 years, Geophys. Res. Letters, 19, 1715-1718, 1992.

Yoshida, S., and Hamano, Y., Geomagnetic decadal variations caused by length-of-day variation, Physics Earth Planet. Interiors, 91, 117-129, 1995

Furuya, M., and Hamano, Y., Effect of the Pacific Ocean on the Earth's seasonal wobble inferred from National Center for Environmental Prediction ocean analysis data, J. Geophys. Res., 103, 10131-10140, 1998.

Yanagisawa, T. and Y. Hamano, "Skewness" of S-wave velocity in the mantle, Geophys. Res. Lett., 26, 791-794, 1999.

Hamano, Y., A new time-domain approach for the electromagnetic induction problem in a 3-D heterogeneous earth. Geophys. J. Int., 150, 753-769, 2002.

Yoshihara, A. and Hamano, Y., Paleomagnetic constraints on the Archean geomagnetic field intensity obtained from komatiites of the Barberton and Belingwe greenstone belts, South Africa and Zimbabwe, Precambrian Res., 131, 111-142, 2004.

和達 三樹 教授

(本学在職期間 昭和55年4月～平成19年3月)



昭和42年3月 理学部卒業
昭和50年5月
助教授(東京教育大学)
昭和55年4月
助教授(教養学部)
平成2年3月 教授(理学部)
平成5年4月 教授(大学院理学
系研究科)(現職)

平成5年4月～平成6年3月 総長補佐

平成15年4月～平成17年3月 評議員

所属：物理学専攻、数理物理学講座

専門分野：物性基礎論・統計力学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

「The Modified Korteweg-de Vries Equation」

J. Phys. Soc. Jpn. 34, 1289-1296, 1973

「Relationships among Inverse Method, Bäcklund Transformation and an infinite Number of Conservation Laws」 Prog. Theor. Phys. 53, 419-436, 1975

「Exactly Solvable IRF Models I. A Three-State Model」 J. Phys. Soc. Jpn. 55, 1092-1101, 1986

「Exactly Solvable Models and Knot Theory」

Physics Reports 180, 247-332, 1989

「Geometrical Strategy for the Optimal Quantum Search」 Phys. Rev. A 64, 042317-1~9, 2001

「Exact Analysis of Soliton Dynamics in Spinor Bose-Einstein Condensates」 Phys. Rev. Lett. 93, 194102-1~4, 2004

大学院農学生命科学研究科・農学部

會田 勝美 教授

(本学在職期間 昭和48年5月～平成19年3月)



昭和43年3月 農学部卒業
昭和48年3月
大学院農学系研究科博士課程
修了・農学博士

昭和48年5月 助手(農学部)

昭和55年1月 助教授(農学部)

平成元年6月 教授(農学部)

平成8年4月 教授(大学院農学
生命科学研究科)

平成15年4月 大学院農学生命科学研究科長・農学部長
(平成19年3月まで)(現職)

所属：水圏生物科学専攻・水圏生命科学講座・
水族生理学専攻分野

専門分野：水族生理学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

「Eel Biology」(編著) Springer, 2003

「魚類生理学の基礎」(編著) 恒星社厚生閣, 2002

「動物生産学概論」(編著) 文永堂出版, 1996

阿部 宏喜 教授

(本学在職期間 平成9年9月～平成19年3月)



昭和44年4月 農学部卒業
昭和49年3月
大学院農学系研究科博士課程
修了・農学博士
昭和49年4月 専任講師
(共立女子大学)
昭和54年4月 助教授
(共立女子大学)

平成4年4月 教授 (共立女子大学)
平成9年9月 教授(大学院農学生命科学研究科)(現職)
所属：水圏生物科学専攻・水圏生命科学講座・
水産化学専攻分野

専門分野：水生動物の比較生理生化学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

「魚の科学」(単行本、編著)朝倉書店、1994

「Biochemistry and Molecular Biology of Fishes
Vol. 4, -Metabolic Biochemistry-」(単行本)
Elsevier、1995

「魚の科学事典」(単行本、編著)朝倉書店、2005
「D-Amino Acids: A New Frontier in Amino Acid
and Protein Research」(単行本) Nova Science
Publishers、2007

鈴木 誠 講師

(本学在職期間 昭和38年4月～平成19年3月)



平成7年2月
大学院農学生命科学研究科
農学博士(論文博士)取得
平成12年4月
講師(大学院農学生命科学
研究科)(現職)
所属：附属演習林・千葉演習林
専門分野：森林経理学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

千葉演習林におけるスギ高齢林の間伐方法に関する検
討 1995

スギ・ヒノキ高齢林の経営論的研究 —東京大学千葉
演習林における人工林経営に関する実験— 1998

スギ高齢林の成育に関する研究 —清澄地域における
高齢人工林の成立過程— 2003

東京大学千葉演習林における天然ヒノキの生育状況
2006

大学院総合文化研究科・教養学部

浅島 誠 教授

(本学在職期間 平成5年4月～平成19年3月)



昭和47年3月
理学系大学院博士課程修了
昭和47年4月
ドイツ・ベルリン自由大学
分子生物学研究所研究員
昭和49年 10月
横浜市立大学助教授
昭和60年1月 横浜市立大学教授

平成5年4月 教養学部教授
平成7年4月 総長補佐
平成8年4月 大学院総合文化研究科教授
平成11年2月 大学院総合文化研究科評議員(兼任)
平成13年 大学院総合文化研究科学部長特別補佐
平成15年2月 大学院総合文化研究科長・教養学部長
平成17年～現在 日本学術会議副会長
平成17年～現在 生命科学教育支援ネットワーク長
大学院総合文化研究科
生命科学構造化センター長

所属：広域科学専攻生命環境系

専門分野：発生生物学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

「発生のしくみがみえてきた」岩波書店

「分子発生生物学」裳華房

「新しい発生生物学」講談社 など多数
英語原著論文 約250篇

跡見 順子 教授

(本学在職期間：昭和54年4月～平成19年3月)



昭和42年3月
お茶の水女子大学文教育学部卒
業(保健体育学科)(教育学士)
昭和48年3月
大学院教育学研究科
体育学専門課程修士課程修了
(教育学修士)
昭和54年3月 大学院教育学研究
科体育学専門課程

博士課程満期退学

昭和55年10月 教育学博士号

昭和54年4月 教育学部助手

57年4月 教養学部講師

60年4月 教養学部助教授

平成6年4月 大学院総合文化研究科
生命環境科学系教授

所属：広域科学専攻 生命環境科学系・身体運動科学

専門分野：細胞生物学、運動生命科学(運動に関する生
理学・生化学・細胞分子生物学)、体力科学、
宇宙生物学、脳神経科学、体育学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

人間の生命科学：とくに遺伝子で決まっていな頑張れば変化する出力依存性で生存する生命適応過程を研究してきた。さらにもう一方では、身心を連携する人間の姿勢や運動等についても脳科学から研究している。

（著書・論文）

・跡見順子等編著 身体運動・栄養・健康の生命環境科学Q & Aシリーズ「骨格筋と運動」, 杏林書院（東京）2000

・跡見順子：II 運動とストレス、10章 運動とストレスタンパク質 [運動生理学シリーズ4] 運動とストレス科学（竹宮隆，下光輝一編）杏林書院，p.131-155, 2003

・跡見順子：からだの中の40億年—運動が生むところ・意志を支えるからだの「ことわり理」— からの原点—21世紀 [養生学] 事始め—（大学体育養生学研究会編）市村出版，p65-83, 2003

・跡見順子：人間が立つこと—ストレッチと重力— 学術会議叢書6 なぜなぜ宇宙と生命—宇宙の中の生命と人間—（吉川弘之、跡見順子編著）（財）日本学術協力財団，東京，p.59-78, 2003

・跡見順子「からだは細胞のすみか：そしてあるじは私—自分を知る生命科学—」16歳からの東大冒険講座1 記号と文化/生命（東京大学教養学部編）培風館2005，p.215-243.

・跡見順子. 子どもの脳を育む身体活動. 子どもと発育発達 2, 168-175, 2004

・跡見順子 身体運動の知恵—生命システムから病を診る—第3回 身体・細胞：協調の原理1 張力—細胞の力を引き出すストレッチ 血管医学7,399-406,2006.

石井 明 教授

（本学在職期間：1970年4月～2007年3月）



1967年3月 教養学部卒業

1969年3月 大学院社会学研究科
修士課程修了

1970年3月 同博士課程中退

1970年4月 助手（教養学部）

1977年12月 助教授（教養学部）

1990年4月 教授（教養学部）

1996年4月 教授（大学院総合文化研究科）

所属：国際社会科学専攻

専門分野：東アジア国際関係史

研究内容（代表的な著書や論文等）：

『中国の政治と国際関係』（共編 東大出版会 1984）

『中ソ関係史の研究 1945—1950』（東大出版会 1990）

『中国20世紀史』（共著 東大出版会 1993）

『記録と考証 日中国交正常化・日中平和友好条約締結交渉』（共編 岩波書店 2003）

『中央アジアの行方 米口中の綱引き』

（共編 勉誠出版 2003）

川合 慧 教授

（本学在職期間：昭和45年10月～平成19年3月）



昭和42年3月 理学部卒業

昭和44年3月

大学院理学系研究科

修士課程修了

昭和45年10月 博士課程中退

昭和45年10月 助手（理学部）

昭和55年2月 講師（理学部）

昭和58年5月 助教授（理学部）

昭和59年10月 助教授（教育用計算機センター）

昭和62年4月 助教授（理学部）

昭和63年6月 教授（教養学部）

平成8年4月 教授（大学院総合文化研究科）

所属：広域科学専攻広域システム科学系

専門分野：計算機科学、とくにコンピュータグラフィックス、計算論

研究内容（代表的な著書や論文等）：

「プログラミングの方法」岩波書店，1988.

「コンピューティング科学」東京大学出版会，1995.

「情報—Introduction to the New Information World」（編著）東京大学出版会，2006.

「Advanced Graphics for Visualization of Shielding Relations」Kamada, T. and Kawai, S., Computer Vision, Graphics and Image Processing, 1988.

「述語論理で表された特徴関数のネットワーク型局面評価器への自動変換」金子知適，山口和紀，川合慧，電子情報通信学会論文誌，2002.

「Automated Identification of Patterns in Evaluation Functions for General Game Players.」Kaneko, T., Yamaguchi, K., Kawai, S., Advances in Computer Games, Many Challengers, 2003.

竹内 信夫 教授

（本学在職期間 昭和59年4月～平成19年3月）

昭和45年5月 文学部卒業

昭和47年3月 修士課程終了

昭和51年3月 大学院人文科学研究科中途退学

昭和51年4月 文学部助手

昭和53年4月 明治学院大学文学部専任講師

昭和55年4月 東京工業大学工学部助教授

昭和59年4月 助教授（教養学部）

平成4年4月 教授（教養学部）

平成8年4月 教授（総合文化研究科）（現職）

所属：日本フランス語フランス文学会・密教図像学会・
日本比較文学会・国際地図学会

専門分野：フランス文学・比較文学比較文化・
日本密教史

谷内 達 教授

(本学在職期間：1987年4月～2007年3月)



1967年3月 教養学部卒業
1970年3月 大学院理学系研究
科修士課程修了
1970年4月 アジア経済研究所
1977年4月 助教授
(北海道大学文学部)
1985年4月 助教授 (三重大学人
文学部)

1987年4月 助教授 (教養学部)

1996年4月 教授 (大学院総合文化研究科)

1991年4月 教授 (教養学部)

所属：広域科学専攻広域システム科学系

専門分野：人文地理学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

『パプアニューギニアの社会と経済』アジア経済研究所, 1982.

Japanese urban development and the railway network, 1880-1980. *Geographical Review of Japan* 57B:111-123, 1984.

オーストラリアの都市システム (山口岳志編『世界の都市システム』57-181) 古今書院, 1985.

Concentration or deconcentration? Metropolitan dominance in the Japanese urban system. *Acta Geographica Lovaniensia* 31:3-7, 1991.

『日本の三大都市圏』(共編) 古今書院, 1994.

オーストラリア経済の地域構造 (山本正三編『産業経済地理-世界』262-280) 朝倉書店, 1995.

Suburban life in a new town: A case of Tama City, Tokyo. *Acta Wasaensia* 45:261-270, 1995.

『ジオグラフィー入門』(共編) 古今書院, 1996.

Development of the Australian urban system in relation to natural resource base, 1851-1991. *Komaba Studies in Human Geography* 13:137-156, 1999.

人文地理学における一般性と固有性 東京大学人文地理学研究 15:119-126, 2002.

馬淵 一誠 教授

(本学在職期間：昭和48年8月～平成19年3月)



昭和43年3月 理学部卒
昭和48年3月
大学院理学系研究科修了
理学博士
昭和56年4月
教養学部助教授に昇任
平成3年4月
教養学部教授に昇任

平成8年4月 大学院総合文化研究科教授に配置換え
昭和57年～昭和62年

岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所助教授(併任)

平成9年から平成14年

岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所教授(併任)

所属：広域科学専攻生命環境科学系

専門分野：分子細胞生物学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

細胞質分裂と細胞運動の分子機構
(代表的論文)

1) Mabuchi, I., and Okuno, M. 1977. The effect of myosin antibody on the division of starfish blastomeres.

J. Cell Biol. 74: 251-263.

2) Mabuchi, I. 1983. An actin-depolymerizing protein (depactin) from starfish oocytes: properties and interaction with actin.

J. Cell Biol. 97: 1612-1621.

3) Mabuchi, I., Tsukita, S., Tsukita, S. and Sawai, T. 1988. Cleavage furrow isolated from newt eggs: contraction, organization of actin filaments, and protein components of the furrow.

Proc. Nat. Acad. Sci. USA 85: 5966-5970.

4) Narumiya, S., and Mabuchi, I. 2002. Spinning actin to divide.

Nature 419, 27-28

5) Kamasaki, T., Arai, R., Osumi, M., and Mabuchi, I. 2005. Directionality of F-actin cables changes during the fission yeast cell cycle.

Nature Cell Biol. 7, 916-917.

宮本 久雄 教授

(本学在職期間：昭和57年4月～平成19年3月)



昭和45年5月 文学部卒業
昭和47年3月
大学院人文科学研究科
修士課程終了
カナダオンタリオ州立大学
フランス国立聖書学考古学
研究所
フランス パリ第VI大学
(パリ・カトリック大学)
博士課程

昭和57年4月 教養学部助教授

平成2年4月 教養学部教授に昇任

所属：超域文化科学専攻比較コース

専門分野：比較古典論、哲学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『他者の原トポス』(創文社)

『存在の季節』(知泉書館)

編集：『物語り論』シリーズ、1～3巻

大学院教育学研究科・教育学部

佐藤 一子 教授

(本学在職期間：平成5年4月～平成19年3月)



昭和42年3月 教育学部卒業
昭和49年3月
大学院教育学研究科博士課程
単位取得退学
昭和51年10月 埼玉大学講師
昭和54年1月 同助教授
平成4年4月 同教授
平成5年4月 本学教授

平成12～13年度 教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター長

所属：生涯学習基盤経営コース

専門分野：生涯学習論・社会教育学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『生涯学習と社会参加』(単著、東京大学出版会、1998年)

『子どもが育つ地域社会』(単著、東京大学出版会、2002年)

『NPOの教育力』(編著、東京大学出版会、2004年)

『現代社会教育学』(単著、東洋館出版、2006年)

土方 苑子 教授

(本学在職期間：平成7年4月～平成19年3月)



昭和42年3月 教育学部卒業
昭和45年4月
大学院教育学研究科
教育学専門課程修士課程修了
昭和49年3月
同博士課程単位取得退学
昭和49年9月
国立教育研究所研究員

昭和58年4月 国立教育研究所主任研究官

平成元年5月 国立教育研究所教育政策研究部
教育政策史料調査室長

平成7年4月 大学院教育学研究科教授

所属：教育学研究科・教育学コース

専門分野：日本教育史

研究内容(代表的な著書や論文等)：

日本近代教育史

『明治前期の町村と小学校の関係の歴史』(単著 埼玉
県東松山市)

『近代日本の学校と地域社会—村の子どもはどう生
きたか—』(単著 東京大学出版会)

『東京の近代小学校—「国民」教育制度の成立過程—』
(単著 東京大学出版会)

『近代日本都市史研究—地方都市からの再構成—』
(共著 日本経済評論社)

矢野 眞和 教授

(本学在職期間：平成15年4月～平成19年3月)



昭和43年3月
東京工業大学工学部卒業
昭和43年11月
東京工業大学 助手
昭和49年10月
国立教育研究所 研究員
昭和56年1月
広島大学大学教育研究センター
助教授

昭和61年4月 東京工業大学工学部 助教授

平成3年10月 東京工業大学工学部 教授

平成15年4月 大学院教育学研究科 教授

所属：総合教育科学専攻 比較社会学コース
高等教育論分野

専門分野：高等教育政策・教育経済学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『大学改革の海図』(単著) 玉川大学出版部、2005

『教育社会の設計』(単著) 東京大学出版会、2001

『高等教育の経済分析と政策』(単著) 玉川大学出版部、
1996

『生活時間の社会学』(編著) 東京大学出版会、1995

大学院数理科学研究科

松本 幸夫 教授

(本学在職期間 昭和44年4月～平成19年3月)



昭和42年3月 理学部卒業

昭和44年3月

大学院理学系研究科修了・
理学博士

昭和44年4月 助手(理学部)

昭和49年4月

助教授(教養学部)

昭和54年10月 助教授(理学部)

平成元年4月 教授(理学部)

平成4年4月 教授(大学院数理科学研究科)(現職)

所属:大域幾何学講座

専門分野:位相幾何学

研究内容(代表的な著書や論文等):

「多様体の基礎」(東京大学出版会 1988)

「Diffeomorphism Types of elliptic surfaces」,

Topology, 25 (1986) 549-563

大学院新領域創成科学研究科

大森 博雄 教授

(本学在職期間 昭和50年7月～平成19年3月)



昭和43年3月

理学部地学科地理学課程卒業

昭和45年3月

大学院理学系研究科地理学

専門課程修士課程修了

昭和49年9月

大学院理学系研究科地理学

専門課程博士課程単位取得退学

昭和49年10月 日本学術振興会奨励研究員

昭和50年7月 助手(理学部)

昭和52年9月 理学博士(東京大学)

昭和58年2月 講師(理学部)

昭和60年11月 助教授(理学部)

平成5年5月 教授(大学院理学系研究科)

平成11年4月 教授(大学院新領域創成科学研究科)

所属:大学院新領域創成科学研究科

環境学研究系自然環境学専攻陸域環境学講座

専門分野:第四紀の環境変動、沙漠化、都市化地域の湧水・河川水の水質形成過程、土地利用変化と流域環境変化の研究

研究内容(代表的な著書や論文等):

「水は地球の命づな」(1993, 岩波書店)

「日本の川」(1986, 1995, 共著, 岩波書店)

「環境変動と地球砂漠化」(1991, 共著, 朝倉書店)

「自然環境の評価と育成」(2005, 共著, 東京大学出版会)

「Geomorphology and Global Tectonics」(2000, 共著, John Wiley & Sons)

「Concepts and Modelling in Geomorphology」(2003, 共著, TERRAPUB)

The Australia-Japan FoundationからSouthern Cross Prize 授与(1986年)。

医科学研究所

澁谷 正史 教授

(本学在職期間 昭和51年7月～平成19年3月)



昭和45年3月 医学部卒業

昭和51年7月

助手(医科学研究所)

昭和52年6月 医学博士(本学)

昭和57年9月

助教授(医科学研究所)

平成2年12月

教授(医科学研究所)

所属:癌・細胞増殖部門 腫瘍抑制分野

専門分野:血管新生、癌、チロシンキナーゼ

研究内容(代表的な著書や論文等):

RNA腫瘍ウイルスのがん遺伝子fpsを初めて単離した。ヒト脳腫瘍におけるEGF受容体の質的異常を初めて明らかにした。血管内皮細胞特異的な受容体キナーゼFlt-1(VEGF受容体-1)を最初に単離し、その血管新生、がん進展における重要性を示した。(Cell 1982; MCB 1988; EMBO J 2001; Cancer Cell 2002; Blood 2006など)

高津 聖志 教授

(本学在職期間 平成3年12月～平成19年3月)



昭和42年3月

富山大学薬学部卒業

昭和48年3月

大阪大学大学院医学研究科修了・医学博士

昭和51年8月

助手(大阪大学医学部)

昭和53年12月 助教授(大阪大学医学部)

昭和57年12月 教授(熊本大学医学部)

平成3年12月 教授(医科学研究所)

(この間平成10年4月～平成15年3月

医科学研究所副所長併任)

所属:感染・免疫部門 免疫調節分野

専門分野:免疫学

研究内容(代表的な著書や論文等):

1)「Interleukin-5 and its Receptor System」(単行本、著者) Springer-Verlag、1994

2)「Interleukin-5: From Molecule to Drug Target for Asthma」(単行本、共著)、Marcel Dekker, Inc., 1999

3)「タンパク質研究のための抗体実験マニュアル」(実験医学別冊、編者) 羊土社、2004

- 4) 「Enhanced hematopoiesis by hematopoietic progenitor cells lacking intracellular adaptor protein, Lnk」 (Journal of Experimental Medicine 195巻2号, 共著論文), Rockfeller University Press, 2002
- 5) 「The role of antigenic peptide in CD4+ T helper phenotype development in a T cell receptor transgenic model」 (International Immunology 16巻12号, 共著論文), Oxford University Press, 2004
他に欧文原著論文254編

竹縄 忠臣 教授

(本学在職期間：昭和58年6月～昭和61年4月、平成4年4月～平成19年3月)

昭和42年3月 京都大学薬学部卒業

昭和42年4月 藤沢薬品工業(株)入社

昭和50年4月 講師(筑波大学)

昭和50年9月 薬学博士(京都大学)

昭和58年6月 助教授(医学部)

平成4年4月 教授(医科学研究所)

所属：癌・細胞増殖部門 腫瘍分子医学分野

専門分野：細胞内情報伝達、細胞生物学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) H. Miki, T. Sasaki, Y. Takai and T. Takenawa
Induction of filopodium formation by a WASP related actin depolymerizing protein N-WASP
Nature 391, 93-97 (1998)
- 2) Itoh, T., Yokoyama, S., Kikuchi, H. and Takenawa T.
The Epsin N-terminal homology (ENTH) domain: a Phosphatidylinositol 4,5-bisphosphate binding domain essential for endocytosis.
- 3) Takenawa, T., and Miki, H.
WASP and WAVE family proteins: key molecules for rapid rearrangement of cortical actin filaments and cell movement. (Review)
J. Cell Sci. 114, :1801-1809 (2001)
- 4) Yamazaki, D., Suetsugu, S., Miki, H., Kataoka, Y., Nishikawa, S., Fujiwara, T., Yoshida, N., and Takenawa, T.
WAVE2, involved in directed cell migration, is required for cardiovascular development
Nature 424, 452-456 (2003)
- 5) Takenawa T. and Suetsugu S.
Cordinated regulation of membrane and cytoskeleton by WASP/WAVE family proteins and their binding partners. (Review)
Nature Rev. Mol. Cell Biol. 8, 37-48 (2007)

御子柴 克彦 教授

(本学在職期間 平成4年4月～平成19年3月)



昭和44年3月

慶応義塾大学医学部卒業

昭和48年3月

慶応義塾大学大学院医学研究科

修了・医学博士

昭和49年4月

講師(慶応義塾大学医学部)

昭和51年1月 パスツール研究所

研究員

昭和57年5月 助教授(慶応義塾大学医学部)

昭和60年5月 教授(大阪大学蛋白質研究所)

(この間 昭和61年4月～平成3年9月)

岡崎国立共同研究機構教授併任)

平成4年4月 教授(医科学研究所)

(この間 平成13年1月

科学技術振興事業団 国際共同研究

カルシウム振動プロジェクト代表研究者

併任

平成14年6月 慈恵医科大学客員教授

平成15年4月 理化学研究所 脳科学総合研究センター

発生・発達研究グループディレクター併任

平成15年10月 スウェーデン・カロリンスカ研究所

客員外国人教授

平成16年4月 山形大学客員教授)

所属：基礎医科学部門 脳神経発生・分化分野

専門分野 神経生化学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) Furuichi, T., Yoshikawa, S., Miyawaki, A., Wada, K., Maeda, N. & Mikoshiba, K.: Primary structure and functional expression of the inositol 1,4,5-trisphosphate-binding protein P400. Nature 342 32-38 (1989)
- 2) Kume, S., Muto, A., Inoue, T., Suga, K., Okano, H. & Mikoshiba, K.: Role of inositol 1,4,5-trisphosphate receptor in ventral signaling in Xenopus embryos. Science 278 1940-43 (1997)
- 3) Saneyoshi, T., Kume, S., Amasaki, Y. & Mikoshiba, K.: The Wnt/Calcium pathway activates NF-AT and promotes ventral cell fate in Xenopus embryos. Nature 417 295-299 (2002)
- 4) Higo, T., Hattori, M., Nakamura, T., Natsume, T., Michikawa, T. & Mikoshiba, K.: Subtype-specific and ER-lumenal-environment-dependent Regulation of Inositol 1,4,5-Trisphosphate Receptor Type 1 by ERp44. Cell 120 85-98 (2005)

- 5) Ando, H., Mizutani, A., Kiefer, H., Tsuzurugi, D., Michikawa, T. & Mikoshiba, K.: IRBIT suppresses IP3 receptor activity by competing with IP3 for the common binding site on IP3 receptor in a phosphorylation-dependent manner. *Molecular Cell* 22 1-12 (2006)

地震研究所

阿部 勝征 教授

(本学在職期間 昭和59年8月～平成19年3月)



昭和43年3月 理学部卒業
昭和48年3月
大学院理学系研究科博士課程修了・理学博士
昭和48年4月 北海道大学講師
(理学部)
昭和49年2月 同助教授(理学部)
昭和59年8月 助教授
(地震研究所)

平成元年4月 同教授(地震研究所)
地震予知情報センター長(現職)

所属：地震予知情報センター

専門分野：地震・津波

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 「地震の物理」(分担執筆), 岩波書店, 1978.
- 「日本の地震断層パラメーター・ハンドブック」(共著), 鹿島出版会, 1989.
- 「地震は必ずくる」, 読売新聞社, 1990.
- 「巨大地震 正しい知識と備え」, 読売新聞社, 1997.
- 「社会地球科学」(共著), 岩波書店, 1998.

社会科学研究所

平石 直昭 教授

(本学在職期間 昭和43年4月～昭和49年3月、
昭和59年4月～平成19年3月)



昭和43年3月 法学部卒業
昭和43年4月
社会科学研究所助手
昭和49年4月 千葉大学助教授
昭和59年4月
助教授(社会科学研究所)
平成2年4月
教授(社会科学研究所)(現職)

所属：比較現代政治部門

専門分野：日本政治思想史

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 『荻生徂徠年譜考』, 平凡社, 1984年
- 『一語の辞典 天』, 三省堂, 1996年
- 『改訂版 日本政治思想史—近世を中心に』, 放送大学教育振興会, 2001年

生産技術研究所

魚本 健人 教授

(本学在職期間：昭和53年2月～平成19年3月)



昭和46年6月 工学部卒業
昭和46年7月 大成建設(株)
昭和53年2月 生産技術研究所助手
昭和56年2月 工学博士
昭和56年9月
助教授(生産技術研究所)
平成4年2月 教授(生産技術研究所)

平成10年7月 国際・産学共同研究センターに配置換え
平成13年4月 生産技術研究所附属都市基盤安全工学国際研究センターに配置換え
センター長に併任(現職)
平成15年4月 生産技術研究所附属千葉実験所長 併任
(現職)

所属：都市基盤安全工学国際研究センター／
人間・社会系部門

専門分野：都市基盤安全工学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 「現代 土木材料」オーム社、1990
- 「コンクリート構造物の非破壊検査」森北出版、1990
- 「コンクリートの劣化や剥落はなぜ起こるのか～トンネル事故や山陽新幹線の高架橋に学ぶ～」学術会議叢書5、日本学術協力財団、2001
- Non-Destructive Testing in Civil Engineering 2000, Elsevier
- Use of Fiber Reinforced Polymer Composites as Reinforcing Material for Concrete, JOURNAL OF MATERIALS IN CIVIL ENGINEERING, 191-209, American Society of Civil Engineers, 2002-05
- 「コンクリート診断学入門 建造物の劣化対策」朝倉書店、2004

榎 裕之 教授

(本学在職期間：1973年4月～2007年3月)



1968年3月
工学部電気工学科卒業
1973年3月
工学系研究科博士課程修了
1973年4月
助教授(生産技術研究所)
1987年6月
教授(生産技術研究所)

1988年4月 先端科学技術研究センターに配置換え

1998年3月 生産技術研究所に配置換え(現職)

所属：情報・エレクトロニクス系部門

専門分野：電子デバイス工学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- (1) 榎 裕之「超格子から量子細線・量子箱まで：ナノ構造による電子の量子的制御」朝倉物理学体系21

「現代物理学の歴史Ⅱ」(815-846頁)(朝倉書店、2004年)

(2) 榊 裕之、横山直樹 編著「ナノエレクトロニクス」(1-26頁)(オーム社、2004年)

(3) H. Sakaki "Fabrication of atomically controlled nanostructures and their device applications", "Nanotechnology" (ed. by G. Timp, Springer Verlag, 1999) (207-256頁)

(4) 江崎玲於奈、榊 裕之 編著「超格子・ヘテロ構造デバイス」工業調査会(1989)

高木 堅志郎 教授

(本学在職期間：昭和47年4月～平成19年3月)



昭和43年3月 工学部卒業

昭和47年3月

工学系研究科博士課程中退

昭和56年1月

助教授(生産技術研究所)

平成元年7月

教授(生産技術研究所)(現職)

所属：基礎系部門

専門分野：波動物理学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

超音波スペクトロスコーピー、動的散乱、フォノン計測などによる分子、分子集合体、複雑流体などソフトマターの物性研究

「超音波便覧」(編集委員長)丸善

「こうもりのヒソヒソ話」裳華房

物性研究所

高橋 實 教授

(本学在職期間：昭和53年8月～平成19年3月)



昭和42年3月 教養学部卒業

昭和47年3月

大学院理学系研究科修士課程修了・理学博士

昭和47年4月

大阪大学教養部助手

(昭和50年11月～

昭和52年10月 CNRS 研究員)

昭和53年8月 助教授(物性研究所)

平成3年4月 教授(物性研究所)(現職)

所属：物性理論研究部門・スピン電子関連領域

専門分野：統計力学・物性理論

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Thermodynamics of One-Dimensional Solvable Models, Cambridge University Press (1999) ;

Modified Spin Wave Theory of Square Lattice Antiferromagnet: Phys. Rev. B 40 (1989) 2494.

高山 一 教授

(本学在職期間：平成7年4月～平成19年3月)



昭和42年3月 理学部卒業

昭和47年3月

大学院理学系研究科修士課程修了・理学博士

昭和47年9月

Institut Max von Laue-Paul

Lougevin 研究員

昭和49年4月 Max-Planck Institut

客員研究員

昭和50年4月 北海道大学理学部助教授

昭和59年8月 京都大学基礎物理学研究所教授

平成元年4月 筑波大学物理学系教授

平成7年4月 教授(物性研究所)(現職)

所属：附属物質設計評価施設・計算物性物理領域

専門分野：物性理論・統計物理学・計算物理学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

「スピングラス」(単行本)丸善、1991

「局在・量子ホール効果・密度波」(単行本、「密度波」を分筆)岩波書店、2000

海洋研究所

石井 輝秋 助教授

(本学在職期間：昭和52年4月～平成19年3月)



昭和45年3月 理学部卒業

昭和47年3月

大学院理学系研究科

修士課程修了

昭和50年3月

同博士課程修了

昭和52年4月

助手(海洋研究所)

平成6年11月 助教授(海洋研究所)

所属：海洋底科学部門、海洋底テクトニクス分野

専門分野：岩石・鉱物学、海洋地質学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

・Ishii T. and Takeda H., Inversion, decomposition and exsolution phenomena of terrestrial and extra-terrestrial pigeonites, Memoir Geol. Soc. Japan, 11, 19-34, 1974.

・Ishii T., Pyroxene geothermometry of basalts and an andesite from the Palau-Kyushu and West Mariana Ridges, Deep Sea Drilling Project Leg 59, Initial Rep. Deep Sea Drilling Project, Washington, D.C. (US Government Printing Office), 59, 693-707, 1981.

・ Ishii T., McCallum S. and Ghose S., Petrological and thermal histories of a lunar breccia 73217 as inferred from pyroxene crystallization sequences, exsolution phenomena and pyroxene geothermometry, Proc. Lunar and Planet. Sci. Conf. 13th, J. Geophys. Res., 88, Suppl. A631-A644, 1983.

・ Ishii T., Dredged samples from the Ogasawara fore-arc seamount or "Ogasawara Paleoland"- "fore-arc ophiolite" : In Formation of Active Ocean Margins, edited by N. Nasu, I.Kushiro, K. Kobayashi, et al., Adv. Earth Planet. Sci., pp. 307-3420, 1985.

・ Ishii T., Lava-flow and subvolcanic magma reservoir composition trends in the Ca-poor pyroxenes of Hakone volcano, Japan, Journal of Petrology, 32, 429-450, 1991.

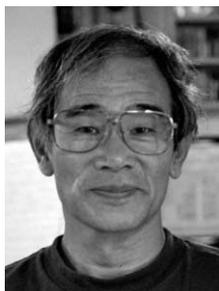
・ Ishii T., Robinson P. T., Maekawa H. and Fiske R., Petrological studies of peridotites from diapiric serpentinite seamounts in the Izu-Ogasawara- Mariana forearc, Leg 125, Proceedings of the Ocean Drilling Program, Scientific Results, 125, Ocean Drilling Program, College Station, TX, 445-485, 1992.

・ 石井輝秋, 佐藤暢, 原口悟, Fryer, P, 藤岡換太郎, Bloomer, S, 横瀬久芳, 伊豆-小笠原-マリアナ前弧域の蛇紋岩海山産カンラン岩の岩石学的特徴, 地学雑誌, 109, 517-530, 2000

・ 石井輝秋, 伴雅雄, 共同編集, 東北日本と伊豆小笠原弧の地殻・マントル構造とマグマ-subduction factoryの物質循環—: 月刊 地球/号外52号, pp238, 2005

太田 秀 教授

(本学在職期間 昭和47年4月～平成19年3月)



昭和44年4月 理学部卒業

昭和47年3月

大学院理学系研究科

博士課程中退

昭和47年4月

助手 (海洋研究所)

昭和58年9月

理学博士 (東京大学)

昭和59年1月 助教授 (海洋研究所)

平成元年3月 教授 (海洋研究所) (現職)

所属: 海洋生態系動態部門底生生物分野

理学系研究科生物科学専攻協力講座

専門分野: 海洋生物生態学・深海底生生物生態学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

「千葉県の自然誌—千葉県の動物2」(分担執筆)

千葉県, 2000

「海の生物」(単行本、監訳) 朝倉書店、2004

「しんかいの奇妙な生き物」(単行本) GB出版、2005

小池 勲夫 教授

(本学在職期間 昭和51年4月～平成19年3月)



昭和46年3月 理学部卒業

昭和50年3月

大学院理学系研究科修了・

理学博士

昭和51年4月

助手 (海洋研究所)

昭和54年7月

助教授 (海洋研究所)

昭和63年1月 教授 (海洋研究所)

平成13年4月～平成17年3月 海洋研究所長

所属: 海洋化学部門 生元素動態分野

専門分野: 海洋生物地球化学、生物海洋学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

海洋におけるコロイド粒子の役割 (論文) Nature, 1990

熱帯海草藻場の生態系 (単行本、編著) CSIRO Australia, 1993

海洋生物の連鎖 (単行本、共著) 東海大出版会、2006

寺崎 誠 教授

(本学在職期間 昭和52年10月～平成19年3月)



昭和43年3月 農学部卒業

昭和48年3月

大学院農学系研究科修了・

農学博士

昭和48年10月

海外技術協力事業団派遣専門家

(タイ)

昭和52年10月 助手 (海洋研究所)

昭和58年4月 助教授 (海洋研究所)

平成6年12月 教授 (海洋研究所)

平成9年7月 センター長

(附属海洋科学国際共同研究センター)

平成14年4月 センター長

(附属大槌臨海研究センター)

平成15年4月 センター長

(附属国際沿岸海洋研究センター)

平成17年4月 所長 (現職)

所属: 沿岸生態分野

専門分野: 生物海洋学・浮遊生物学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

「Biology of Chaetognatha」Oxford Univ. Press, 1991

「Large Marine Ecosystems of the Pacific Rim」Blackwell Sci., 1999

「三陸の海と生物」(共著)、サイエンティスト社、2005

アイソトープ総合センター

巻出 義紘 教授

(本学在職期間 昭和48年12月～平成19年3月)



昭和42年3月 理学部化学科卒業
昭和47年3月
大学院理学系研究科修了・
理学博士
昭和62年5月 助教授(理学部)
平成元年3月
教授(アイソトープ総合センター)(現職)

平成15年4月 センター長(現職)

所属: アイソトープ総合センター・研究開発部門

専門分野: 放射化学・地球環境化学・超微量分析化学

研究内容(代表的な著書や論文等):

「フロン」(東京大学出版会)1990

"Laser Separation of Tritium" in

"Laser Applications in Physical Chemistry" (Marcel Dekker) 1989

"Tropospheric Concentration of Methylchloroform, CH_3CCl_3 , in January 1978 and Estimates of the Atmospheric Residence Times for Hydrohalocarbons" Proc. Natl. Acad. Sci. USA, 78, 5933 (1981)

" CO_2 Laser Isotope Separation in Ternary Mixture of H/D/T Compounds" Int. J. Appl. Radiat. Isotopes, 32, 881 (1981)

"The Concentration of Krypton in the Atmosphere - Its Revision after Half a Century -" Chem. Lett. 34, 1396 (2005)

国際・産学共同研究センター

安田 浩 教授

(本学在職期間 平成9年4月～平成19年3月)



昭和42年3月 工学部卒業
昭和47年3月
大学院工学系研究科修了・
工学博士

昭和47年4月
日本電信電話公社入社

昭和62年9月
NTTヒューマンインターフェース研究所 画像メディア研究部長

平成4年4月 NTT企業通信システム本部 開発部長

平成7年7月 NTT理事・情報通信研究所所長

平成9年4月 教授(先端科学技術研究センター)

平成15年4月～17年3月 教授・センター長
(国際・産学共同研究センター長)

平成10年4月 教授 (国際・産学共同研究センター)
(現職)

所属: 国際・産学共同研究センター

専門分野: 応用情報工学

研究内容(代表的な著書や論文等):

「マルチメディア符号化の国際標準」丸善、1991

「画像符号化技術-DCTとその国際標準」

オーム社、1992

「デジタル画像圧縮の基礎」日経BP社、1996

「標準インターネット教科書」アスキー出版、1996

「新世紀デジタル講義」新潮社、2002

「MP E G教科書」アスキー出版、2003

「コンテンツ流通教科書」アスキー出版、2003

国際・産学共同研究センターでは、産学連携を推進するデータベース（東京大学産学連携テーマ提案データベース、<http://www-db.ccr.u-tokyo.ac.jp/>）を運営している。企業と中性子利用の共同研究を進めている研究室が東大内に複数あるとの情報を得たため、1月15日（月）、現地にて利用施設の視察を行った。

本学中性子科学研究施設は、日本原子力研究開発機構原子力科学研究所の改造3号炉（JRR-3）の中性子を利用し、様々な装置を設置して物質科学の研究を展開している。中性子ビームを用いる研究装置を利用する実験では、1回の利用に4～5日かかるため、宿泊所・居室（研究宿泊棟）が用意されている。ビジネスホテル並みの設備が整っており、オンラインにより本郷キャンパスと同様に文献検索も可能ということで、缶詰状態の実験期間も十分快適に過ごすことができそうである。

また原子力機構がJRR-3に設置している装置群は、文部科学省が（財）放射線利用振興協会に委託している「中性子利用技術移転推進プログラム」により、今年度より産業利用が進められている。既に、18年度には40件以上の産業利用課題が実施され、その中の顕著な成果を上げたもの4件については、前述のデータベースでも紹介している。



50GeVシンクロトロン内部に設置された電磁石

現在建設中の日本原子力研究開発機構J-PARCの視察では、陽子の加速器である50GeVシンクロトロンの内部と物質・生命科学実験施設を見学した。50GeVシンクロトロンは、直径500m、1周1.6kmにもなる巨大な設備である。装置を稼働させると放射線が発生するため、地下に遮蔽して設置してある。陽子を加速するための電磁石は約300台で、陽子の軌道に狂いが生じないように寸分のずれもなく並べられている。

物質・生命科学実験施設には、発生した中性子を測定装置に導くビームラインが23本建設予定で、原研、高エネルギー加速器研究機構（KEK）が本設備に設置する

装置の建設を担当しているが、地元自治体の茨城県も産業利用を推進する目的で2基の建設を進めている。当日も、自治体職員による視察が同時開催されていた。



物質・生命科学実験施設の内部

非常にスケールの大きな研究施設であり、このような研究施設を設置するには国・大学・自治体の協力が欠かせないことを実感した。

JRR-3は引き続き産業利用を推進し、J-PARCは平成20年度から順次施設稼働開始予定である。産・官・学の積極的な施設活用により、様々な分野における研究・開発がますます発展していくことが期待される。



3GeVシンクロトロン前にて

1月17日（水）18時半から、昨年新築された駒場コミュニケーション・プラザ南館2階で、「平成18年度総合文化研究科長・教養学部長ならびに数理科学研究科長と外国人留学生との懇談会」が開催された。

この催しは駒場キャンパスの教職員と駒場で学ぶ留学生とが一堂に会し、懇談を通じて、相互理解を深めることを目的として毎年開かれているものである。当日は学部学生、大学院生、チューターや教職員あわせて150人近い参加者となった。

会は、中西徹教養学部国際交流・留学生委員会委員長の開会の辞ではじまり、主催者である木畑洋一総合文化研究科長・教養学部長と桂利行数理科学研究科長の挨拶があったのち、総合文化研究科の小島憲道副研究科長の発声で乾杯、にぎやかな懇談がはじまった。

途中、地域文化研究専攻博士課程の張旭梅さん、教養学部理科一類2年の王哲君が、駒場での留学生活について見事な日本語でのスピーチを行い、喝采を博した。

また、今年も生協の協力を得て、会場で餅つきが行われた。当初は、杵を持ち、餅をついてみることに皆尻込みしていたものの、徐々に挑戦する人が出てきて、最終的には多くの留学生が経験することができた。つきたての餅をほおばりながら交流の輪がひろがった。

会はなごやかな雰囲気の中に、総合文化研究科の西中村浩副研究科長の閉会の辞をもって20時すぎに閉会した。



駒場キャンパス・研究科長と留学生の懇談会集合写真

2月16日（金）～17日（土）に教育学部附属中等教育学校において、第6回全国中高一貫教育研究会が行われた。全国から486名の参加者を迎え、盛会のうちに終了した。

1日目の午前には2時間で17の公開授業、午後にはその研究協議会、全体会総会を行った。研究協議会では当日の授業内容に加えて、教科での中高一貫カリキュラムの具体化に向けた問題点などについて話し合われた。また、夕方からは情報交換会も開かれ、お互いの学校の状況を積極的に話しながらの情報交換が行われた。



2年数学の研究授業の様子

2日目の午前には、「生徒の発達段階に応じた指導のあり方」「特色ある教育課程の評価と課題」など4つの分科会に分かれ、それぞれ3校ずつの話題提供者からの実践を聞いた後に議論した。午後には、本学教育学研究科の佐藤学教授の講演会、続いてシンポジウム「中高一貫教育の評価」が行われた。

参加者からは「他校の実践が分かったので、職場に戻って同僚と情報を共有したい」「中高一貫教育の魅力とともにその教育課題を再認識した」などの感想が寄せられている。



シンポジウムの様子

「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館一連携に果たす大学の役割」に200名参加

2月17日(土)13時から17時半まで、東京大学創立130周年記念事業の一つとして、公開シンポジウム「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館一連携に果たす大学の役割」が農学部弥生講堂一条ホールで開催された。本学の3つの部局が連携して「知の構造化」のもとに新しい試みを行うとあって、図書館、博物館、文書館の現場関係者はもとより、コンテンツの作成者、システム構築者など多様な分野の人々がちょうど200名集まり、熱心に議論が行われた。

研究者にとって研究資料は欠くことができないものだが、それを学術的な収集・保存・利用管理システムとして組織的に扱うことは後回しになりがちであり、それ故研究室は資料だらけになってしまう。発表では、古代高句麗の壁画の現物、模写、そして写真や模写をもとに3Dのビデオを作成した具体的事例から始まり、そうしたデジタルアーカイブを統合的に作成する基盤をどのようにつくるか、また、学術資源の共用化に向けて「館」を超えたシステムづくりと人材育成をどのように行うかについての提案が行われ、また異なった立場からのコメントが表明された。

日本ではこうした分野の活動の重要性が十分に評価されておらず、とくに専門職員の位置づけや養成・研修体制の整備が不十分である。このシンポジウムでは、デジタルアーカイブのシステム構築を行うことで連携に向けた共通の足場がつけられる方向が見いだせることが確認された。また、それを含めて、本学がもつ知的資源をこうした資料と情報の組織化に向けることに対する期待が外部の参加者から強く表明された。



パネルディスカッションで壇上に並んだ報告者とコメントーター（司会は吉見俊哉大学院情報学環長）



休憩時には発表に関するデモが行われ、熱心に見入っていた

教職員と留学生・外国人研究者との懇親会

2月21日(水)18時からスカイレストランブルークレール精養軒(東大病院内)で理学系研究科・理学部の教職員と留学生・外国人研究者との懇親会が開催され、留学生・客員研究者とその家族、教職員、合わせて44名の参加者があった。岩澤理学系研究科長の英語による歓迎の挨拶、平賀事務長の乾杯の音頭で会が開始された。

会半ばに中国からの留学生YUAN Chaoxiaさんとフランスからの研究員BIENIA Margueriteさんによる見事な日本語のスピーチが行われ、また豪華賞品付きの全員参加のゲームや職員によるモーニング娘。の歌と踊りが会をさらに盛り上げ、最後はスウェーデンからの留学生BERGSTROM Andreasさんを中心に全員で坂本九の「上を向いて歩こう」をしっとり歌いあげた。最後に西原国際交流委員長の温かい閉会の挨拶で終了し、参加者全員楽しい時間を過ごすことができた。

今回の特記事項のひとつは、レストラン側の深いご理解により、料理は全てイスラム教徒の方々の食材制限を配慮したものとなり、これまで参加を見送っていた学生にも大変喜ばれたことである。また、15階からの夜景の素晴らしさとあいまって懇親会の雰囲気がいっそう引き立てられたことを付記する。



どの顔にも笑みが...



職員によるパフォーマンスで盛り上がる



会の後半、全員参加のゲームを楽しむ

物性研究所

第5回物性研技術発表会開催される

部局

2月22日(木)物性研究所6階講義室において、第5回物性研技術発表会が開催されました。口頭発表6件、ポスター発表10件、計16件の発表があり、69名(筑波大4名、大阪大1名、東北大1名、新領域1名、人工物センター1名、物性研究所内61名)の参加者がありました。日頃の技術職員の業務や失敗談、苦労話、研究開発の成果など、技術発表会ならではの発表があり、参加者からも質問、意見が出されました。

夕方からは懇親会が催され、研究所内の技術職員同士、また筑波大学の技術職員との意見交換が行われました。終始和やかな雰囲気の中、大成功のうちに閉幕しました。

IR3S



Integrated Research System
for Sustainability Science
サステイナビリティ学
連携研究機構

さすてなTimes vol. 12

IR3Sのこれまで、これから

武内和彦

サステイナビリティ学連携
研究機構 副機構長

「世界最高水準のネットワーク型研究拠点を創る」との意気込みで、サステイナビリティ学連携研究機構(IR3S)の本格活動を昨年4月から開始し、まる1年が過ぎようとしています。大言壮語に終わった、と言われないよう、IR3S副機構長として、東奔西走の毎日です。

国内外の連携を深めるには、何よりも直接の会話が不可欠と、IR3S設立以来、30回を超えるシンポジウムを開催しました。なんと、その3分の2以上が国際シンポジウムです。私も、その半分ほどに出席し、多くの新しい出会いを楽しんでいます。

東洋大学が提唱する「共生哲学」は、私には新鮮でした。竹村教授の話で、共生概念の源は1922年の共生会運動に遡ることを初めて知りました。「草木国土悉階成仏」という仏教の教えが、環境と人間の浄化による仏の国土を目指すという意味で、サステイナビリティ学そのものであることもよく分かりました。

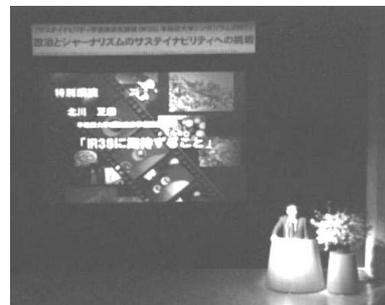
もちろん、苦労もあります。何よりもネットワーク内のコミュニケーションが複雑になっています。メールによるやりとりでは誤解が誤解を生むことがしばしばあります。そういう場合には、必ず電話、できれば直接会って話し合うことにしています。IR3Sのスタッフにも、そのように頼んでいます。

4月からIR3Sに2つの協力機関が加わることになりました。早稲田大学と立命館大学です。早稲田大学は、政治的意思決定とジャーナリズム、立命館大学は「調和社会」構築への戦略的イノベーション、をそれぞれテーマとして活動を開始します。

先日、IR3Sと早稲田大学共催の「政治とジャーナリズムのサステイナビリティ学への挑戦」と題するシンポジウムに参加してきました。持続可能な社会の構築を目指すうえで、科学と社会をつなぐジャーナリズムと政治の役割は重大です。このシンポジウムでは、北川教授(元三重県知事)が、講演を行いました。この中で、政治家をサステイナビリティに巻き込むには、「マニフェスト」

に書き込むようにしてもらうのが最も効果的だと強調していたのが印象的でした。

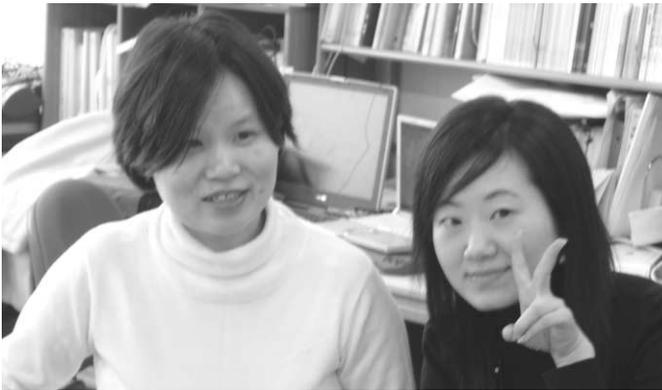
新たな協力機関を得ながら、IR3Sはさらに強固なネットワーク型研究拠点を目指します。



(さすてなTimesは、しばらくお休みをいただきます。再開をお楽しみに！)

外国人として体験した
東大のバリアフリー先端科学技術研究センター バリアフリー分野リサーチフェロー
全英美（チョン・ヨンミ）さん

私は日本の視覚障害者の教育や福祉及びバリアフリーについて学ぶために10年半前に来日した全盲女性です。2001年に東京大学先端学際工学専攻のバリアフリー分野博士課程に入学し、2005年に博士（学術）を取得しました。論文タイトルは「視覚障害鍼師の鍼施術における課題と衛生施術に関する研究」です。この論文は、視覚障害鍼師の施術能力について衛生面を題材にして確認したもので、鍼施術の衛生面において視覚障害を持つことが問題にならな



左はチョンさん、右は支援者ソン・セミさん

いことを明らかにしたものです。この研究において、視覚障害鍼師の施術場面をビデオカメラに撮影してそれを分析する手法を取りましたが、この方法で進める際に、支援者による映像の説明や様々な図表作成などの支援をいただきました。こうした本学のバリアフリー支援室よりご提供いただいた支援はかけがえのないものでした。

2006年4月には本学先端科学技術研究センターのリサーチフェローとして採用されました。リサーチフェローとして研究の遂行のために月曜日から金曜日までの勤務にあたり、大学でフルに支援者を雇用していただいて学会発表や論文作成及び事務処理など様々な仕事において支援を受けています。この支援者はアソートという人材派遣会社から派遣されています。一方で、本学では、障害のある教職員や学生のためにキャンパス内のバリアフリー化を進めており、例えば、視覚障害者が安全に目的地に行けるよう積極的な取り組みをしていますので、より利用しやすいキャンパスになってきました。

このような大学の研究の環境の中で、私は現在障害者の職業リハビリテーションや外国人身体障害留学生の就学に対する支援に関する研究を進めています。特に、「外国人身体障害留学生の就学に対する支援に関する研究」については、外国人障害学生が対面する様々な困難の実態を明らかにし、この困難を解消するための支援方法を提示した就学支援プログラムの開発を目指しています。

心のバリアフリー

法学部（私法コース）3年生
吉良 宣哉さん

私がバリアフリー支援室の扉を叩いたのは、昨年6月のことだった。「聴覚障害学生のためのノートテイク・講義内容のテープ起こし」のアルバイトを募集している旨の掲示を見たことがきっかけである。私はそれまで障害者支援活動に携わったことはなく、参加を決めた理由も「講義の空きコマを埋めよう」という程度の感覚だった。と同時に、支援室のドアを開けるまで、私は未だ体験したことのない「障害者支援」という言葉の重さに内心で身構えていた。

しかし、私の予想と違い、そこは明るくアットホームな場所だった。それは支援室を訪れる人が皆共通して抱く印象だったのだろう。そうした雰囲気から惹かれて支援室に集う人々と交わる内に、私の躊躇はいつの間にか消えていた。おそらく私は無意識のうちに、「健常者は障害者を支援すべきだ」という誤った命題を立てていたのだと思う。そのような区分はア priori に存在するのではないし（私自身、日常では意識しないものの左手に軽度の障害を有している）ましてや

支援の有無は“べき論”ではない。「障害者支援」と言っても肩肘張る必要はなく、単に「人が人と交わる」一場面なのだ気づかされた。支援室には常に笑いが絶えない。障害の有無に関わらず、私たち学生がふらりと立ち寄ることができる場所なのである。時には学生どうし世間話に花が咲くこともあるが、いつの間にか世間話と支援活動についての話題がシームレスに繋がっている。また、職員の方が季節ごとにイベントを開催して下さることもあり、私にとって支援室はあたたかき砂漠の中のアアシスのような場所である。そうした空気が、私に気づかせてくれたに違いない。

バリアフリーの実現に際して、講義のノートテイクをする、施設にスロープを設けるといった物理的な支援が必要なことは言うまでもない。しかし、乗り越えるべき本当のバリアはその先にあるだろう。無意識の前提を脱構築し、「心のバリアフリー」をも実現するという意味において、バリアフリー支援室は私たちに肥沃な土壌を提供していると思う。



<東京大学バリアフリー支援室 連絡先> E-mail: spds-staff@mm.itc.u-tokyo.ac.jp

本郷支所(理学部旧1号館135号室): TEL 03-5841-1715 FAX 03-5841-1717

駒場支所(先端科学技術研究センター3号館503号室): TEL:03-5452-5067 FAX:03-5452-5068

東京大学エッジキャピタルからのお知らせ

東京大学エッジキャピタル（通称：UTEc）

東京大学エッジキャピタル（UTEc）は、本学の研究成果である知的財産・技術や、教育成果である人材を、大学発ベンチャーという目に見えるカタチで社会に還元する目的で2004年4月に設立されました。UTEcは、本学の持つ優れた研究成果・人材を活用したベンチャー企業に対して投資を行い、その投資リターンの一部は大学に還元され、大学の研究開発・人材育成の更なる活性化に活用されます。大学からの知の社会還元と、その成果の大学への還元という好循環を生み出すことがUTEcのミッションです。

VCファンド

UTEcは、本学の持つ優れた研究成果・人材を活用したベンチャー企業に対して投資を行う「技術移転関連事業者」として、本学に認定された唯一のベンチャーキャピタル（VC）ファームであり、現在約83億円のVCファンドを運営しております。VCファンドとは、銀行・保険会社等の機関投資家から運用を委任された投資ファンドです。大学の一般的な公的助成金とは異なり、非常に可能性が高いと同時にリスクも高いベンチャーのような事業で用いるのに最適な資金です。

・・・VCファンドの概要・・・

- ◆名称 ユーテック号投資事業有限責任組合
- ◆期間 2004年7月1日から2013年12月31日まで
- ◆規模 約83億円
- ◆投資実績 23社、約29億円（2007年2月末現在）

また、UTEcは、ベンチャー企業への投資を行うだけでなく、事業化に至るまでの様々な経営支援を通じたサポート業務も行っております。大学発ベンチャーと一口で言っても、その形態は多様であり、代表的な例だけでも次の6つの類型があります。

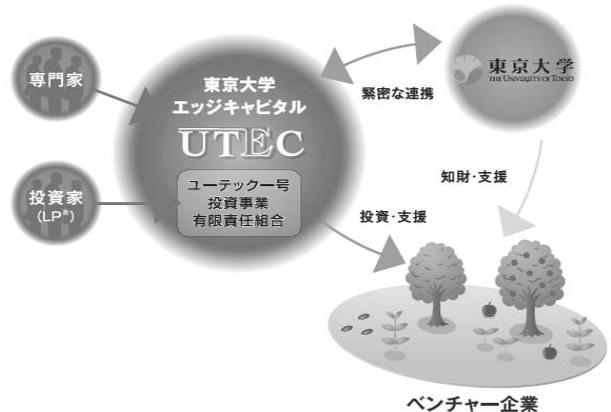
- ★研究者起業型：教授等研究者自らが起業するパターン
- ★ポスドク起業+研究室支援型：ポスドクが起業し、教授等が技術支援するパターン
- ★博士号取得者起業型：博士号取得者が就職後数年を経て起業し、教授等が技術支援するパターン
- ★学生起業型：学生が在学中や卒業後に起業するパターン
- ★既存大学発ベンチャー成長支援型：既存の大学発ベンチャーの新たな成長ステージを支援するパターン
- ★既存企業+大学技術型：既存の企業が共同研究等を通じ、大学発の技術を活用して更なる成長を模索するパターン

事業化の可能性の検討段階から

UTEcは、本学の研究者・学生・卒業生のパートナーとして、早い段階から事業化の可能性について一緒に検討して参ります。発明届を提出される際にUTEcに情報を開示していただければ、東京大学TLO（CASTI）と連携して研究室を訪問させていただきます。また、本年1月から各研究科所を個別に訪問してUTEcの活動についてご説明させていただく学内ロードショーも順次開催しております。

研究成果の事業化や起業等に関するどのようなご関心、ご相談でも結構ですので、どうぞお気軽にお問い合わせ下さい。

電話：内線21490（外線03-5841-1490）
e-mail:info@ut-ec.co.jp



第3期アントレプレナー道場参加学生募集

「もししたら自分のアイデアや研究成果を事業化できるかも」と少しでも感じたことはありませんか？

本年も、いよいよアントレプレナー道場が始まる時期が近付きました。第1期、第2期を通して約400名の学生が参加登録をしました。本年度は学生からの強い要望もあり、初級・中級コースの段階で講義・演習等のセッションを増やすことにしました。どうぞ奮ってご参加ください。

募集期間：3月19日～4月18日

応募資格者：

本学に在籍する学部学生、大学院生、ポスドク

参加費用：無料

選抜方式：

プログラムの途中で提出されるビジネスプランの評価によって進級者の選抜があります。

表彰：

最終発表審査会で優秀チームを表彰します（正賞+副賞）。

設立出資：

優秀チームについては設立（起業）とビジネスプランの充実を条件に東京大学エッジキャピタルが設立出資に応じることがあります。

初級コース勉強会予定：

4月24日、5月8日、5月15日、5月22日、5月29日の5回（いずれも火曜日）19:00-21:00

@薬学系研究科総合棟2階講堂

★産学連携本部ホームページからお申し込みください。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp>

★「アントレプレナー道場物語」で第2期道場の様子が分かります。一度アクセスしてみてください。

連絡先：産学連携本部（研究協力部 産学連携課）
電話：内線22857（外線03-5841-2857）



脱・片付けられない人～デスクトップ整理術～

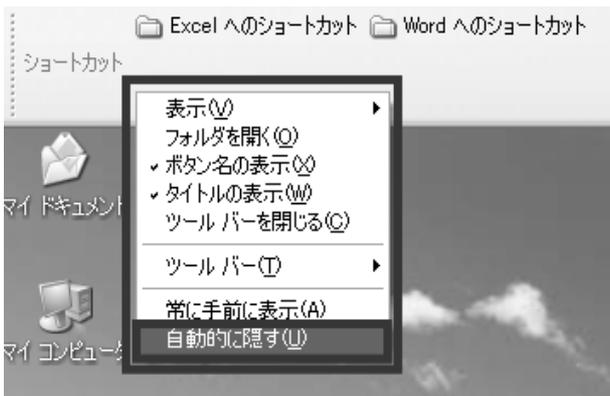
デスクトップ、散らかっていませんか？

毎月使うから・・・とっていると、なかなか片付けられませんよね。机だけではなく、デスクトップもきれいにすれば、仕事運アップ間違いなしです。

- ① よく使うファイルやフォルダ、ショートカットを一つのフォルダにまとめて、マイドキュメント等に置きます。
- ② 作成したフォルダを選択し、画面上部にドラッグします。フォルダの画像が半分位消えた状態でフォルダを離すと下図のようなショートカットが作成されます。



- ③ このままでは、ショートカットは消えません。必要がないときには自動的に隠す設定にするには、ショートカット上で右クリックし、「自動的に隠す」にチェックを入れましょう。画面のどこかをクリックするとショートカットが消えます。



マウスを画面上部に近づけると、設定したショートカットが現れます。

頻繁に使うファイルや申請書をこうして置いておけば、すばやくファイルを開くことができます。

※最初に作成した元ファイルを削除すると、このショートカットは消えてしまいます。

今回でこの連載は終了します。これからもPC講習会及びヘルプデスクをよろしく願いいたします。

問合せ：総務部情報課運用管理チーム (内)22179

調達本部です



第24回 電話代はいくらですか？

メールと電話はどっちが便利か？ 単純に答は出ないように思いますが、大きな流れとしては、電話、特に職場の卓上電話の役割は減じつつあるように思います。それでも、本学ではこの卓上電話の使用料として毎年1億7千万円ほどを電話会社に支払っています。この支払い金額は業務用携帯電話を含まないものです。

中曾根内閣による3公社民営化から20年経過といわれますが、そのときまでわが国の国内電話会社は電々公社（日本電信電話公社）1社だけでした。現在のNTTです。本学では、ごく一部の例外を除き、ずっと電々公社そしてNTTの電話を利用してきました。現在は他に複数の電話会社が設立されたこともあり、契約更新時に複数社から参考見積りをとるなどしてきましたが、正式に公募のうえサプライヤを選定する手続きはとられてきませんでした。

調達本部では、所管の施設部と協議した結果、一度公募の形で複数の電話会社にプレゼンの機会を設けることにしました。もちろん、今後東大として卓上電話にどのような役割を期待するか、IP電話の可能性はどうかといった議論も必要になります。ただ、それはそれとして、まず競争原理を機能させる機会をもつことを優先し、現行機能を基本とする仕様で価格競争をして頂こうと思っています。現在のNTT社との契約は12月末までありますが、その更改時期を待つことなく、できるだけ早いスケジュールで実施したいと思っています。

また、さきほど1億7千万円には含まれないといった業務用携帯電話に関しては、全て各部局毎の個別契約となっていることもあって、何台あるのか、いくら払っているのか、本部ではさっぱりわかりません。これは、ともかく一度実態を調査したうえで、個々の携帯電話に東大としてどのような機能が必要と考えるのか、言い換えれば何のために持たせているのかを整理したうえで、これもサプライヤの集約を図りたいと思っています。

電話代を含め「公共料金」といわれてきた分野は、あたかも全てが「公定料金」で、交渉で価格が下がるものではないといった固定観念があったように思われます。実際には、民営化などによりすでに自由競争に委ねられている分野も多く、また、公定料金ではあってもさまざまな値引きメニューが用意されている分野もあります。もちろん、すでに各種の割引を活用している場合もあるようですが、調達本部では電話代以外についても順次見直しをかけていきたいと思っています。



調達本部連絡先 ☎22148 櫻井

■新商品のご紹介

お待たせいたしました!! 泡盛「御酒(うさき)」ミニボトルの登場です。遠方へお持ちになる際にも気軽に持ち運べるコンパクトサイズに仕上げました。ちょっとしたプレゼントにいかがでしょうか?

「御酒」をまだお試しいていない皆様、この機会にぜひお召し上がりください。

■「御酒ミニボトル」

- 販売価格：1,995円(税込)
- 容量：300ml



■1,000本限定記念ラベル



3月22日(木)より、ご卒業・ご入学の記念に1,000本限定記念ラベルの「御酒」を発売いたします。

パッケージは春らしい暖かみのあるデザインになっております。なお、この「御酒」は数量限定となっており、完売しだい終了とさせていただきますのでご了承下さいませ。

■UTCCスタッフ紹介 ～Part 5～

コミュニケーションセンター(UTCC)では東大の学生が活躍しています。今後も少しずつ紹介できればと思っておりますのでよろしく願います。励みになりますので店頭で見かけた際はお声がけ下さい。



人文社会系研究科
基礎文化研究専攻
哲学専門分野 修士2年
彦田 理矢子

UTCCの学生スタッフとして店頭で勤務していると、ショップにいらっしゃる多くの学外の方に接することになります。UTCCはその名の通り、東大の内外とのコミュニケーションの場となっていると感じます。

私のお気に入り、立派な装丁の、ハンドメイドのUTCCオリジナル東京大学ノートです。実は、明治17年に「松屋」というお店が輸入紙を糸で綴じ合わせて、東大の学生向けに売り出したのが大学ノートの名の由来だそうです。お客様への商品説明のためにそんなちょっとしたことを調べたり覚えたりするのも、楽しみの一つです。

(担当：コミュニケーションセンター 辻)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

大学院情報学環

シンポジウム「中・韓・日ジャーナリストとの対話：いま、東北アジアの言論空間を考える」

このたび、大学院情報学環では、トヨタ財団の後援を得て「中・韓・日ジャーナリストとの対話：いま、東北アジアの言論空間を考える」というテーマで国際シンポジウムを開催します。

日時：3月31日(土) 10:00～

会場：本郷キャンパス 弥生講堂・一条ホール

主催：東京大学大学院情報学環

後援：トヨタ財団

(入場無料・定員300人まで先着順)

プログラム(予定、変更の可能性あり)

午前：大学院情報学環 姜尚中教授

基調講演

「東北アジアの市民的公共圏とジャーナリズム」

午後：中・韓・日のジャーナリズムをめぐるジャーナリストとの対話

討論者：姜尚中、吉見俊哉、林香里(以上、情報学環教員)、隈元信一(朝日新聞論説委員)、野中章弘(アジア・プレス・インターナショナル代表)

参加記者：中国広州『南方周末』、中国北京『青年報』、中国黒龍江省『晨報社』、韓国『プレシアン』、韓国『時事ジャーナル』、韓国『文化日報』、共同通信社、『高知新聞』、『信濃毎日新聞』ほか

※ シンポジウムの問い合わせ先

TEL:03-5841-5910

(大学院情報学環 林香里研究室)

E-mail: asiajournalism@hotmail.co.jp

URL: <http://asiajournalism.iii.u-tokyo.ac.jp/>

シンポジウム・講演会

総務部

第106回 (平成19年春季) 東京大学公開講座 「グローバル化」～世界を駆けめぐる ヒト・モノ・カネ その光と影～

春の公開講座を「グローバル化」 というテーマで開催します。この講座は、今後も一段と進行するであろうグローバル化に適切に対処するためにも、グローバル化を多様な側面から — 光の面だけでなく、影の面も含めて — 皆さんと一緒に考えてみようという試みです。本学の多くの学部、研究センターの教員が講義・討論に参加します。本学の学生は無料、教職員は半額で受講いただけます。奮ってご参加ください。

4月7日 (土) 「グローバル化と国家・社会・経済」

植田和男・高山博・石黒一憲・柳田辰雄

21日 (土) 「グローバル化と食・農業」

鈴木宣弘・本間正義・伊藤元重・生源寺真一

5月12日 (土) 「グローバル化と安全」

山影進・近藤豊・小林和彦・小池俊雄

19日 (土) 「グローバル化と技術」

坂村健・藤本隆宏・渡辺裕

6月2日 (土) 「グローバル化と人」

吉川泰弘・恒吉僚子・金子元久

会場：大講堂(安田講堂)

受講料：全講義 (5日間) 一括申込：4,000円

選択申込：1日につき1,000円

※高校生は無料

東京大学の学生は無料、教職員は半額

※申込方法等、詳細はホームページをご覧ください。

東京大学ホームページトップ画面にリンクがあります。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_j.html

問い合わせ：

総務部広報課

電話：03-3815-8345 (直通) 内線：82032

e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

大学院理学系研究科・理学部

第11回理学部公開講演会開催のお知らせ

テーマ：「挑戦する理学～自然の謎に迫る～」

理学の究極の目標は自然現象を明らかにし、そのしくみを理解することにある。近代科学の発展のおかげで、現在ではさまざまな自然現象が解明されているが、まだまだ未知のことは数多く残されている。

また、研究が進んだがために認識されるようになった新たな謎も数多い。理学部で現在行われている最先端の研究を例に、挑戦を続ける理学の姿をご覧いただきたい。

講演内容：

江口 徹 (理学系研究科 物理学専攻 教授)

「アインシュタインの夢と超弦理論」

程 久美子 (理学系研究科 生物化学専攻 助教授)

「生命の神秘にせまるRNA」

山内 薫 (理学系研究科 化学専攻 教授)

「光の場の中の分子」

日時：4月20日 (金) 18:00～20:30 (17:00開場)

場所：駒場キャンパス 数理科学研究棟大講義室

入場：無料、事前申込不要

定員：240名 (超過の場合は講演会場外にて生中継上映も予定)

主催・問い合わせ先

大学院理学系研究科・理学部

TEL：03-5841-7585

E-mail：shomu@adm.s.u-tokyo.ac.jp

URL：<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/PL11>

シンポジウム・講演会

生産技術研究所

第12回ICUSオープンレクチャご案内 ICUSの活動—これまでの道のり、これからの展望—

趣旨

都市基盤安全工学国際研究センター (ICUS) は、21世紀の安全な都市基盤整備のために安全工学の様々な研究、情報普及を行うことを目的に2001年4月に設立されました。ICUSは、サステナブル・エンジニアリング部門、都市防災安全工学部門、都市情報ダイナミクス部門から構成され、都市構造物の安全性の評価・維持管理技

術の開発、自然災害による基盤設備の構造安全性、災害時の使用安全性の確保のための研究、都市基盤に関する情報をモニタリングし平常時および非常時の都市基盤施設の安全な運用を確保するための技術の開発と評価、及び国際的な活動を行っています。今回のオープンレクチャは、6周年の成果の発表および今後の活動に対して原点を振り返る場と考えております。是非、多くの方々にご参加頂き、今後のICUSの活動にご理解、ご協力をお願いします。

日時：4月25日（水）13:30～17:00
（受付開始時刻は、13:00～）

場所：生産技術研究所 総合研究実験棟（An棟）2階
コンベンションホール

プログラム

- 13:00～ 受付開始
13:30～ 開会の挨拶と趣旨説明
大岡龍三（生産技術研究所ICUS 助教授）
13:35～ 「都市防災とコンクリート」
魚本健人（生産技術研究所ICUSセンター長）
14:20～ 「都市環境と災害の観測と評価」
安岡善文（生産技術研究所 教授）
15:05～ 「ICUS海外研究員 からICUSに寄せて」
15:35～ 休憩
15:50～ 「これからの都市防災：
ハードとソフト、国内と国際の視点から」
目黒公郎（生産技術研究所ICUS 教授）
16:35～ 閉会の挨拶
安岡善文（生産技術研究所 教授）
17:00～ 懇親会

申し込み方法

席に限りがございますので、お申し込みはお早めに下記E-MailかFAX でお願いたします。

E-mail : icus@iis.u-tokyo.ac.jp

FAX : 03-5452-6476

※終了後、懇親会を予定しております。
（会費：¥1,000 場所：An棟2階 ホワイエ）

問い合わせ先

生産技術研究所
都市基盤安全工学国際研究センター（ICUS）
吉本 英子
TEL：03-5452-6472
E-mail：yosimoto@iis.u-tokyo.ac.jp
URL：http://icus.iis.u-tokyo.ac.jp/index-j.htm

お知らせ

お知らせ

退職教員の最終講義

学内広報では、1月から3月の間に発行される各号において、今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義のお知らせを掲載します。

大学院医学系研究科・医学部

加藤 進昌 教授

（精神医学）

日時：3月22日（木）15:00～16:30

会場：鉄門記念講堂

演題：「21世紀をこころの世紀に —ある精神科医の35年—」

幕内 雅敏 教授

（肝胆膵外科学）

日時：3月31日（土）16:00～17:30

会場：鉄門記念講堂

演題：「肝胆膵外科と私」

大学院総合文化研究科・教養学部

馬淵 一誠 教授

（広域科学専攻 生命環境科学系）

日時：3月20日（火）15:00～

会場：駒場Iキャンパス教養学部13号館1313号室

演題：「細胞はどうやって分裂するか」

地震研究所

阿部 勝征 教授

日時：3月23日（金）16:00～17:00

会場：地震研究所1号館セミナー室

演題：「津波規模の定量化とその意義」

お知らせ

附属図書館

平成19年度 総合図書館オリエンテーション 開催

初めての方はもちろん、これまで利用したことのある方も、この機会に資料の宝庫と呼ばれる総合図書館を使いこなせるよう、ぜひご参加ください。内容は、以下の通りです。1コマ30分で、1コマだけでも参加できます。

- 利用案内（総合図書館の利用案内）
- 書庫案内（書庫の案内・利用法）
- OPAC入門（学術情報ゲートウェイGACoSの紹介とOPACの使い方）
- 国際資料室案内（国際資料室の資料とインターネットによる検索）

●予約不要・総合案内カウンター（1階）集合

英語によるコースも用意しています。準備の都合上、英語によるコースのみ、なるべく事前に総合図書館参考調査係(sanko@lib.u-tokyo.ac.jp)へお申込ください。

スケジュール

| 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|
| 4/9 利用案内 13:30-14:00 書庫案内 14:00-14:30 OPAC入門 14:30-15:00 | 4/10 利用案内 15:30-16:00 書庫案内 16:00-16:30 OPAC入門 16:30-17:00 | 4/11 | 4/12 利用案内 10:30-11:00 書庫案内 11:00-11:30 OPAC入門 11:30-12:00 | 4/13 利用案内 15:30-16:00 書庫案内 16:00-16:30 OPAC入門 16:30-17:00 |
| 4/16 利用案内 10:30-11:00 書庫案内 11:00-11:30 OPAC入門 11:30-12:00 ○英語コース （利用案内・OPAC） 15:30-17:00 | 4/17 利用案内 13:30-14:00 書庫案内 14:00-14:30 OPAC入門 14:30-15:00 | 4/18 ○英語コース （利用案内・OPAC） 10:30-12:00 利用案内 15:30-16:00 書庫案内 16:00-16:30 OPAC入門 16:30-17:00 | 4/19 利用案内 10:30-11:00 書庫案内 11:00-11:30 OPAC入門 11:30-12:00 | 4/20 利用案内 13:30-14:00 書庫案内 14:00-14:30 OPAC入門 14:30-15:00 |
| 4/23 国際資料室案内（2回） 10:30-11:00/15:30-16:00 | 4/24 国際資料室案内（2回） 10:30-11:00/15:30-16:00 | 4/25 国際資料室案内（2回） 10:30-11:00/15:30-16:00 | 4/26 （休館日） | 4/27 |

お知らせ

アイソトープ総合センター

平成19年度新規放射線取扱者全学一括講習会 開催と放射線取扱者再教育用資料の配付

東京大学においてアイソトープや放射線発生装置（X線発生装置〔百万電子ボルト未満〕等を含む）、電子顕微鏡（加速電圧100 kV以上）等を使用する人（放射線取扱者）は、全員、所属部局で登録し、放射線安全取扱・法令等の教育・訓練を受講し、特別健康診断を受診することが必要です。とくに、新たに放射線取扱者になるようとする人は、予め所属部局に登録申請し、全学一括で開催される新規放射線取扱者講習会を受講することが義務づけられています。全学一括の新規放射線取扱者講習会には、研究等に放射線を利用する人を対象とする「R I コース」と「X線コース」、放射線診療従事者を対象とする「診療放射線コース」と「核医学コース」があります。放射線取扱の内容により受講が必要なコースが異なります。

平成19年度の全学一括新規放射線取扱者講習会の開催予定は以下のとおりです。

(注意)

本センターでは、平成19年10月～平成20年3月に、耐震改修ならびに放射線防護施設改修工事が行われるため、例年12月に実施しておりました英語によるR Iコース、X線コースなどは繰り上げて実施いたしますので、ご注意願います。

平成19年度新規放射線取扱者講習会開催日程

◎ R I コース日程（平成19年）

| | <1日目講義・2日目実習> | <定員> |
|-----------|-----------------|------|
| 第132回 (A) | 5月14日(月)、15日(火) | 60名 |
| 第132回 (B) | 5月14日(月)、16日(水) | 60名 |
| 第133回 (A) | 5月22日(火)、23日(水) | 60名 |
| 第133回 (B) | 5月22日(火)、24日(木) | 60名 |
| 第134回 (A) | 6月18日(月)、19日(火) | 60名 |
| 第134回 (B) | 6月18日(月)、20日(水) | 60名 |
| 第135回 (A) | 7月25日(水)、26日(木) | 60名 |
| 第136回 (A) | 10月9日(火)、11日(木) | 60名 |
| 第136回 (B) | 10月9日(火)、12日(金) | 60名 |

◎ 英語R I コース日程（平成19年）

| | <1日目講義・2日目実習> | <定員> |
|----------|------------------|------|
| 第17回 (A) | 10月10日(水)、11日(木) | 20名 |
| 第17回 (B) | 10月10日(水)、12日(金) | 20名 |

◎ X線コース日程（平成19年）

| | <講義のみ> | <定員> |
|-----------|----------|------|
| 第100回 | 5月17日(木) | 120名 |
| 第101回 (柏) | 5月18日(金) | 120名 |
| 第102回 | 5月25日(金) | 120名 |
| 第103回 | 7月2日(月) | 120名 |
| 第104回 | 9月28日(金) | 120名 |

◎ 英語X線コース日程（平成19年）

| | <講義のみ> | <定員> |
|------|----------|------|
| 第14回 | 9月28日(金) | 30名 |

(以上の各コースは、第101回X線コース以外は、アイソトープ総合センターの教育訓練棟で実施します)

各回の定員を上回る申込みのある場合には、受講する回を変更して頂く場合もあります。また、日本語が理解できない留学生や外国人研究者のために、英語によるX線コースとR Iコースをそれぞれ9月末、10月上旬に開催します。新たに外国人受入れ予定のある関連研究室では、ご承知おき下さい。

5月開催のR IコースおよびX線コースの受講希望者は、できるだけ早く、所属部局の事務室または放射線管理室へお申し込み下さい（締切り日は部局により異なりますので、確認して下さい）。まず部局での申込・登録が必要です。アイソトープ総合センターで直接申込みを受け付けることはできません。

この他に、全学一括新規放射線取扱者講習会の診療放射線コースと核医学コースも開催する予定です。詳細が決まり次第、病院部局の担当係に連絡いたします。平成19年度新規放射線取扱者講習会の開催日程と募集については、アイソトープ総合センターのホームページ (<http://www.ric.u-tokyo.ac.jp/>) でも案内しています。一方、以前より放射線取扱者である人は、毎年、それぞれの部局で再教育を受けることが法令により定められています。実施内容や方法については、それぞれ所属の研究室や部局の担当者に確認して下さい。

アイソトープ総合センターでは、東京大学における放射線取扱者（約6,000名）の再教育における参考資料として、毎年、年度始めに8～12ページの小冊子「放射線取扱者再教育用資料」を登録されている取扱者全員に配布しております。平成19年度に配付する「放射線取扱者再教育用資料 No.25 (2007)」の内容は、「航空機乗務員等の宇宙線被ばくについて」、「RIの運搬について」、「研究用X線発生装置の届出と安全管理について」です。資料が配付されましたら目を通して頂き、今後の研究および放射線管理の参考にして下さい。

渡辺 洋三 名誉教授

渡辺洋三先生は、病氣ご療養中のところ、2006年11月8日にご逝去されました。享年84歳でした。

先生は1921年11月に東京都にお生まれになり、第一高等学校を経て、1942年10月に東京帝国大学法学部に入学されましたが、1943年12月から学徒動員でタイ・ビルマ戦線に



送られ、捕虜生活を経て1946年8月に復員・復学、1947年9月に同大学法学部を卒業されました。その後、東京大学大学院特別研究生等を経て、1958年1月に東京大学社会科学研究所の助教授に就任され、1966年1月に教授に昇任、1982年4月に定年退官されました。1974年3月からの2年間は、社会科学研究所長および東京大学評議員を併任され、大学の管理運営にご尽力されました。

先生のご研究は、民法をはじめとして憲法、行政法、農業法、社会保障法、司法制度等の広汎な領域に及んでいますが、先生は、その分析に当たって一貫して法社会学の方法を用い、日本の法社会学の発展に決定的な貢献をなさいました。早い時期の『農業水利権の研究』（1954。博士論文）や『法社会学と法解釈学』（1959）の基礎の上に築かれたその膨大な研究業績は、『法社会学研究 1～8』（1972～1981）等にまとめられています。また、先生は、現代の法現象を総体的に把握するための理論的分析枠組の構築に努められ、『現代法の構造』（1975）、『法社会学とマルクス主義法学』（1984）等によって、学界を超えて学生・市民にも大きな影響を与えました。

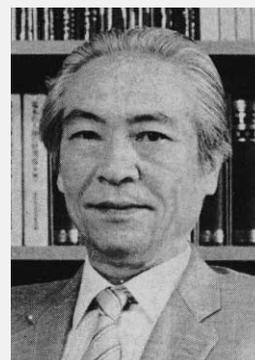
先生は、ご退官後は帝京大学法学部で1997年3月まで教鞭をとられ、更に多数の研究業績を公にされました。

先生は、1969年～1985年までの間、日本学術会議の会員・第2部部長・副会長として学術行政に多大な寄与をされるとともに、学会活動でも民主主義科学者協会法律部会、日本法社会学会、日本農業法学会等において、理事長・事務局長・常任理事等の要職を務められました。そうした「先生の人と学問を語る会」が学会関係者により本年2月に開催され、併せて先生の『略歴・業績目録』が刊行されています。

温厚で飾らず、いつもにこやかに教職員と親しく過ごされた先生の面影を偲びつつ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(社会科学研究所)

大石嘉一郎 名誉教授

大石嘉一郎先生は、病氣療養中のところ、2006年11月21日、中咽頭癌のため東京大学病院で逝去されました。享年79歳でした。



先生は1927年9月に福島県伊達郡保原町にお生まれになり、第二高等学校を経て、1950年3月に東京大学経済学部を卒業されました。卒業後、直ちに福島大学経済学部に助手として採用され、講師・助教授として1963年まで同大学に勤められました。この時代における先生のお仕事は、明治維新史・自由民権運動史を農業史・地方行財政史の側から明らかにすることであり、精力的な実証研究で注目されておられました。

先生は1963年10月に36歳で社会科学研究所に助教授として赴任され、1969年に教授に昇進され、1988年3月まで勤務されました。この間に先生は、日本経済史研究の中心メンバーとして大小様々な単位の共同研究を組織され、地主制史・産業革命史・帝国主義史等の諸分野での研究を精力的に進められました。『産業革命の研究』、『日本帝国主義史』、『近代日本における地主経営の展開』、『近代日本の行政村』、『近代日本都市史研究』等、日本経済史研究上の重要著作がこうして生み出されました。

ご定年後には2001年まで明治学院大学で教鞭をとられるとともに、1989年以降、自らの研究の集大成として七冊にのぼる単著を刊行され、最後まで日本経済史研究の第一線で活躍されました。

先生は、学会活動においても持ち前の企画力と事務能力を発揮され、土地制度史学会（現：政治経済学・経済史学会）の事務局長・理事代表を長く務められ、学会運営の近代化と研究交流の充実に努められました。同時に先生は、大学行政面でも行動力を発揮され、社会科学研究所の所長（1982-84年）、学術会議会員（1985-91年）として、学術行政の刷新と附置研究所の充実に貢献されました。

豪放磊落な性格で、本研究所内外の教職員と常に親しく過ごされた先生の面影を偲びつつ、ご冥福をお祈り申し上げます。
(社会科学研究所)

池田幸男農学系教務課長は、去る2月19日(月)に病氣療養中のところ急逝されました。享年59歳の若さであり、また、突然のことでした。通夜、告別式はご自宅近くの式場で執り行われ、生前の池田教務課長の人徳を示すように多数の方々が参列され最後の別れを惜しまれました。池田教務課長は、昭和41年4月東京大学に奉職され、50年10月新潟大学病院、52年9月浜松医科大学、62年4月東京大学医科学研究所管理課医事掛長、平成2年4月入試課入学試験第二掛長、5年4月社会情報研究所庶務掛長、7年4月医学部附属病院医事課医事主任、9年4月医事課課長補佐、11年4月主任専門職員、13年4月医療サービス課長、16年7月医療支援課長、17年4月から農学系教務課長を歴任されました。



同氏は、平成17年6月突如病魔に襲われましたが、入院・自宅療養に専念された甲斐があり、17年12月には、職場に復帰され元気に職務を勤められておりました。しかし、平成18年6月再発され入院、自宅療養をしていたところでありましたが、本年2月18日容態が急変され、2月19日未明帰らぬ人となってしまいました。

同氏は、平成17年4月に大学院農学生命科学研究科・農学部で教務課長として赴任され、研究科のカリキュラム編成改革、教務課の事務組織の改編等と教務課長として豊富な知識と人一倍の責任感をもって、積極的に取り組み、また、本研究科に異動される前は、医学部附属病院に長年勤務され、病院運営・患者サービスの向上に献身的に取り組んで来られました。

同氏は、温厚なお人柄で何事にも誠実に対応され、教職員の信頼も厚く敬愛されておりました。

これからのご活躍が期待されていた矢先、あまりに突然に訪れたご逝去は誠に痛惜の念に堪えません。

ここに池田幸男教務課長の業績と人柄を偲び、深く哀悼の意を表するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(大学院農学生命科学研究科・農学部)

事務連絡

人事異動(教員)

発令日、部局、職、氏名(五十音順)

| 発令年月日 | 氏名 | 異動内容 | 旧(現)職等 |
|---------|---------------|--------------------------|-----------------------|
| (退職) | | | |
| 19.2.15 | 草加 浩平 | 辞職(大学院工学系研究科特任教員) | 大学院工学系研究科助教授 |
| 19.2.17 | 後藤 晃 | 辞職(公正取引委員会委員) | 先端科学技術研究センター教授 |
| 19.2.28 | 松本 高志 | 辞職(北海道大学大学院工学研究科・工学部助教授) | 大学院工学系研究科助教授 |
| 19.2.28 | HANNAH LESLIE | 任期満了 | 大学院経済学研究科教授 |
| (採用) | | | |
| 19.2.16 | 舟橋 正浩 | 大学院工学系研究科助教授 | 独立行政法人産業技術総合研究所研究員 |
| 19.2.16 | 梅田 秀之 | 大学院理学系研究科助教授 | 大学院理学系研究科研究機関研究員 |
| 19.3.1 | 吉田 敏 | 生産技術研究所助教授 | 生産技術研究所産学官連携研究員 |
| (昇任) | | | |
| 19.2.16 | 増田真理子 | 留学生センター助教授 | 留学生センター講師 |
| 19.2.16 | 狩野 直和 | 大学院理学系研究科助教授 | 大学院理学系研究科助手 |
| 19.2.16 | 井元 清哉 | 医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター助教授 | 医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター助手 |
| 19.3.1 | 佐藤 守俊 | 大学院総合文化研究科助教授 | 大学院理学系研究科講師 |
| 19.3.1 | 佐倉 統 | 大学院情報学環教授 | 大学院情報学環助教授 |
| (配置換) | | | |
| 19.3.1 | 藤森 淳 | 大学院理学系研究科教授 | 大学院新領域創成科学研究科教授 |
| (兼務命) | | | |
| 19.2.16 | 小島 憲道 | 大学院総合文化研究科長 教養学部長 | 大学院総合文化研究科教授 |

* 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

平成19年度 学内広報発行スケジュール

学内広報の平成19年度発行スケジュールは以下の通りです。寄稿の際に、ぜひ、ご参照ください。

| 号数 | 原稿締切日 (原則第1・第3水曜日) | 発行日 (原則第2・第4水曜日) | 配付日 (原則第3火曜日) |
|------|------------------------------|---------------------|------------------|
| 1355 | 4月 4日(水) | 4月 11日(水) | 4月 17日(火) |
| 1356 | 4月 18日(水) | 4月 25日(水) | 5月 7日(月) |
| 1357 | 5月 9日(水) | 5月 16日(水) | 5月 22日(火) |
| 1358 | 5月 23日(水) | 5月 30日(水) | 6月 5日(火) |
| 1359 | 6月 6日(水) | 6月 13日(水) | 6月 19日(火) |
| 1360 | 6月 20日(水) | 6月 27日(水) | 7月 3日(火) |
| 1361 | 7月 4日(水) | 7月 11日(水) | 7月 18日(水) |
| 1362 | 7月 18日(水) | 7月 25日(水) | 7月 31日(火) |
| 1363 | 9月 5日(水) | 9月 12日(水) | 9月 19日(水) |
| 1364 | 9月 19日(水) | 9月 26日(水) | 10月 3日(水) |
| 1365 | 10月 3日(水) | 10月 10日(水) | 10月 17日(水) |
| 1366 | 10月 17日(水) | 10月 24日(水) | 10月 30日(火) |
| 1367 | 10月 31日(水) | 11月 7日(水) | 11月 13日(火) |
| 1368 | 11月 14日(水) | 11月 21日(水) | 11月 28日(水) |
| 1369 | 学生生活実態調査特集号(予定) | | |
| 1370 | 12月 5日(水) | 12月 12日(水) | 12月 18日(水) |
| 1371 | 1月 9日(水) | 1月 16日(水) | 1月 23日(水) |
| 1372 | 1月 23日(水) | 1月 30日(水) | 2月 5日(火) |
| 1373 | 2月 6日(水) | 2月 13日(水) | 2月 20日(水) |
| 1374 | 2月 20日(水) | 2月 27日(水) | 3月 4日(火) |
| 1375 | セクシュアル・ハラスメント アンケート結果特集号(予定) | | |
| 1376 | 3月 5日(水) | 3月 12日(水) | 3月 18日(火) |

※5月及び1月は、第1水曜日が連休中にあたるため、締切日を第2、第4水曜日とします。

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先: 総務部広報課 広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393 内線22031 E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

EVENT LIST

| 行事名 | 日時 | 場所 | 連絡先・HP等 |
|--|--|--|--|
| 社会科学研究所 現代日本研究会 Non-Nuclear Weapons States and Nuclear Proliferation | 3月20日(火) 18:00~ | 赤門総合研究棟5階 549号室 | Minako Sato E-mail: satom@iss.u-tokyo.ac.jp URL: http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/cjg/ |
| 生産技術研究所 計測技術開発センター公開シンポジウム 「化学物質汚染に関する計測と対策」 | 3月23日(金) 13:30~ | 生産技術研究所 An棟2階コンベンションホール | 生産技術研究所 計測技術開発センター URL: http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/~tatsuma/symp3.html |
| 東文研セミナー 「Ethnic Autonomy for Sustainable Peace in Nepal」 | 3月23日(金) 15:00~ | 東洋文化研究所会議室 (工学部8号館7階) | 「南アジア北部における人類学的研究の再検討」班研究会 名和克郎 E-mail: nawa@ioc.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ |
| 海外先進教育実践支援プログラム 国際シンポジウム 国際標準の学部初年次教育実現へ向けて 一教員・職員・学生の新しい連携の形— | 3月26日(月) 13:00~17:00 | 駒場キャンパス18号館ホール | 教養教育開発機構 TEL:03-5454-6660 URL: http://www.komed.c.u-tokyo.ac.jp/mirapro/20070326.pdf |
| FRESH START@駒場 | 3月28日(水) 13:00~17:00 | 駒場キャンパス18号館ホール | 教養教育開発機構 TEL:03-5454-6660 URL: http://www.komed.c.u-tokyo.ac.jp/ |
| ローマ条約調印50周年記念公開セミナー 「ローマ条約と欧州統合の“父”たち」 | 3月29日(木) 17:00~ | 駒場キャンパス アドミニストレーション棟 学際交流ホール | 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター事務局 E-mail: desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/f/sympo_e134.html |
| 情報学環国際シンポジウム 「中・韓・日ジャーナリストとの対話： いま、東北アジアの言論空間を考える」 ※38ページ参照 | 3月31日(土) 10:00~ | 弥生講堂・一条ホール | 東京大学大学院情報学環 林香里研究室 TEL:03-5841-5910 E-mail: asiainjournalism@hotmail.co.jp URL: http://asiajournalism.ii.u-tokyo.ac.jp/ |
| 東大農場公開シンポジウム | 4月2日(月) 13:00~18:00 | 弥生講堂・一条ホール | 東大農場公開シンポジウム組織委員会事務局 http://www.fm.a.u-tokyo.ac.jp/spotlights/topics_12.html |
| 東京大学創立130周年記念事業 第4回東京大学の生命科学シンポジウム BIOUT2007 ※1353号参照 | 4月14日(土) 10:00~ | 安田講堂 | 生命科学教育支援ネットワークシンポジウム当番世話人 入村達郎/酒井京子 TEL: 03-5841-4870/FAX: 03-5841-4879 E-mail: biout2007@lse.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.lse.u-tokyo.ac.jp/biout2007.html |
| 理学部第11回公開講演会 「挑戦する理学～自然の謎に迫る～」 ※39ページ参照 | 4月20日(金) 18:00~20:30 (17:00開場) | 駒場キャンパス 数理学研究棟大講義室 | 大学院理学系研究科・理学部 Tel: 03-5841-7585 E-mail: shomu@adm.s.u-tokyo.ac.jp |
| 第15回講演会 光触媒研究講座 「光触媒研究・技術発展の歴史・現状・展望」 | 4月24日(火) 13:15~16:45 | 先端科学技術研究センター 4号館講堂(2階) | 光機能材料研究会事務局 FAX: 03-5452-6593 |
| 第12回 ICUS オープンレクチャ ICUSの活動—これまでの道のり、これからの展望— ※39ページ参照 | 4月25日(水) 13:30~17:00 | 生産技術研究所 総合研究実験棟(An棟)2階 コンベンションホール | ICUS(アイカス) Tel: 03-5452-6472 Fax: 03-5452-6476 E-mail: icus@iis.u-tokyo.ac.jp |
| 行事名 | 開催期間 | 場所 | 連絡先・HP等 |
| 印刷博物館・東京大学大学院情報学環 共催 企画展示 モード・オブ・ザ・ウォー 東京大学大学院情報学環所蔵 第一次世界大戦期 プロパガンダ・ポスターコレクションより ※1351号参照 | 1月20日(土) ~3月25日(日) 休館日: 毎週月曜日 開館時間: 10:00~ 18:00 (入場は17:30まで) | 印刷博物館 | 印刷博物館 TEL: 03-5840-2300 (代表) URL: http://www.printing-museum.org/ |
| 東京大学創立130周年記念特別展示 「東京大学コレクション—写真家上田義彦のマニエリスム博物誌」展 | 2月5日(月) ~4月27日(金) | 総合研究博物館本館 | 総合研究博物館 TEL: 03-5777-8600/FAX: 03-5841-8451 E-mail: web-master@um.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.um.u-tokyo.ac.jp/ |
| 常設展示「(新制)東京大学総長著作展(1) —南原総長から向坊総長まで—」 ※1353号参照 | 3月1日(木) ~5月31日(木) | 総合図書館3階ロビー | 附属図書館 URL: http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ |
| EndNote入門セミナー ※1353号参照 | 3/8(木)、3/14(水)、 3/27日(火) 15:00~16:30 | 3/8 駒場図書館1階会議室 3/14 柏図書館1階 メディアホール 3/27 総合図書館3階大会議室 | 情報基盤センター 学情情報リテラシー係 E-mail: literacy@lib.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html |
| 所蔵品展 「測る人・描く人」 | 3月24日(日) ~5月31日(木) | 駒場キャンパス 自然科学博物館 | 自然科学博物館 http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html |
| 創造の広場イタリア | 3月24日(土) ~6月17日(日) 休館日: 毎週火曜日 開館時間 10:00~ 18:00 | 駒場博物館1階 美術博物館展 示室 | 東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館 〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL:03-5454-6139 FAX:03-5454-4929 |
| 第3回 高齢者教室 (老後を迎えるにあたって起こり得る様々な問題につ いての、老年病の各専門分野の方々の講演) ※1352号参照 | 3月28日から6月13 日までの毎週水曜日 (4/4と4/11は休み) 14:00~ | 東大病院 入院棟A 15階大会議室 | 東大病院老年病科 TEL: 03-5800-8652 担当 野村 |
| 第106回(平成19年春季) 公開講座「グローバル化」 | 4月7日、21日、5月 12日、19日、6月2 日 各土曜日 | 安田講堂 | 総務部広報課 電話 03-3815-8345 (直通)内82032 E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp |
| 駒場IIリサーチキャンパス公開2007 | 5月31日(木) ~6月2日(土) | 駒場IIリサーチキャンパス | 先端科学技術研究センター URL: http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/events/index.php#events104 |

Contents

特集

- 02 東大の研究成果を世界に発信！
東京大学学術機関リポジトリ～UT
Repository～
- 04 本郷地区統一の自転車・バイク登録制度

NEWS

一般ニュース

- 08 総務部
平成19年度 学科・専攻等の設置等について
- 10 研究協力部
卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支
援団体等と総長との懇談会
- 11 環境安全本部
「春の火災予防運動」に伴う消防演習等、
実施される
- 12 研究協力部
東京大学基金による平成19年度国際交流助
成事業の採択決まる

部局ニュース

- 14 退職教員の紹介
- 30 国際・産学共同研究センター、物性研究所
中性子科学研究施設・J-PARC視察会
- 31 大学院総合文化研究科・教養学部
駒場キャンパスで研究科長と留学生の懇談
会開催される
- 31 大学院教育学研究科・教育学部
附属中等教育学校で中高一貫教育の公開研
究会を開催
- 32 大学院情報学環、大学院教育学研究科、大学院人文社会
系研究科
「知の構造化と図書館・博物館・美術館・
文書館一連携に果たす大学の役割」に200名
参加
- 32 大学院理学系研究科・理学部
理学部教職員と留学生・外国人研究者との
懇親会
- 33 物性研究所
第5回物性研技術発表会開催される

コラム

- 33 さすてなTimes Vol.12
- 34 バリアフリーの現場から 第7回
- 35 Crossroad～産学連携本部だより～Vol.13
- 36 PCサブリ 最終回
- 36 調達本部です 第24回
- 37 龍岡門横丁断 第14回
- 37 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第10回
- 38 コミュニケーションセンターだより No.32

編集後記

暖冬の今年は桜の開花も早まる様子。この号が皆さんの手元に届く頃にはすでに満開になって
いるかもしれません。卒業生を送り出し、新入生を迎え入れる。そして、運営組織も人事異動
により新たに組みかえられていく。ヒトの細胞が生まれ変わるように、キャンパスの細胞も
次々に生まれ変わります。大学という生命体にとって、130歳はまだまだ思春期なのではない
でしょうか。(し)

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 38 大学院情報学環
シンポジウム「中・韓・日ジャーナリスト
との対話：いま、東北アジアの言論空間を
考える」
- 39 総務部
第106回（平成19年春季）東京大学公開講
座「グローバル化～世界をかけ
めぐるヒト・モノ・カネ その光と影～
- 39 大学院理学系研究科・理学部
第11回理学部公開講演会開催のお知らせ
- 39 生産技術研究所
第12回ICUSオープンレクチャージャゴ案内
ICUSの活動—これまでの道のり、これから
の展望—

お知らせ

- 40 退職教員の最終講義
- 41 附属図書館
平成19年度 総合図書館オリエンテーショ
ン開催
- 42 アイソトープ総合センター
平成19年度新規放射線取扱者全学一括講習
会開催と放射線取扱者再教育用資料の配付

訃報

- 43 渡辺 洋三 名誉教授
- 43 大石嘉一郎 名誉教授
- 44 池田 幸男 農学系教務課長

44 事務連絡

46 EVENT LIST

淡青評論

- 48 「多数」のもたらすもの

◆ 表紙写真 ◆

UT Repository トップ画面
(2 ページに関連記事)



七徳堂鬼瓦

「多数」のもたらすもの

"More Is Different" は本学名誉博士P. W. Andersonの名句であり、素粒子の構造とその基本法則が解明されれば物理学は終わり、という説に対する批判として述べられたものとされる。

物性物理学で言えば、原子核と電子の巨大な集団が思いもよらない現象を引き起こし、それは一個の原子を眺めてわかるものではない、本質的に異なる事柄である。その代表が「相転移」で、液体固体の転移を始め、磁性や超伝導なども相転移を経て生じる。実に劇的なものであり、秩序が発生すると、個々の自由度の個性は埋没し、相転移の巨大な渦に巻き込まれて行く。

これは、物質科学にだけ当てはまる話ではなく、巨大な数の人間集団に生じる社会現象は、個々の人間の特性とは別物と考えてよかろう。我々は前世紀に第2次大戦を始め、とんでもない「相転移」をいくつか体験した。これらの相転移は避け得ないものだったのか？物質の相転移ではしばしば過冷却など「準安定」な相が生じる。そして、ちょっとした刺激で安定な相へ向かって雪崩のごとく転移する。社会現象に対する「刺激」に関しては、ある程度人間の意志が反映されることもあるようだ。9・11もその類と見る事ができる。直後に世界最強国の全米2億人が突然「右へならえ」してしまった相転移は、個人的には事件以上に恐るべき出来事を感じた。

今、新しい型の相転移の足音を感じる。More Is Different. このアジアには現在未曾有の数の人類が棲息している。北京オリンピックの準備の様子を見て、東京オリンピックを思い出される方々もおられると思うが、前者は文字通り桁違いのスケールで進んでいる。これに限らず、アジア全体が近代化転移の渦に飲み込まれようとしているように見える。この「社会現象」と地球環境のような自然界の相転移が協力してしまったらどうなるのか？おそらく我々はすでに相転移のとば口において、抗しがたい力である方向へ流されていくしかないのだろう。「温暖化対策には企業のインセンティブがない」と格好を付けてみたり、こうやってのんびりと「淡青評論」などを書いたりしながら……。

勝本信吾（物性研究所）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1354 2007年3月14日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>